

袋井市内遺跡発掘調査報告書Ⅰ

中畦横須賀堤発掘調査，大屋遺跡発掘調査，青木遺跡 3 次発掘調査
松下館試掘確認調査，初越居廻遺跡試掘確認調査，松原居廻遺跡試掘確認調査

2 0 0 6

袋 井 市 教 育 委 員 会

袋井市内遺跡発掘調査報告書Ⅰ

中畦横須賀堤発掘調査，大屋遺跡発掘調査，青木遺跡 3 次発掘調査
松下館試掘確認調査，初越居廻遺跡試掘確認調査，松原居廻遺跡試掘確認調査

2 0 0 6

袋井市教育委員会

例 言

- 1 本書は、2001年度から継続している浅羽町内遺跡発掘調査報告書作成事業(2002年に『浅羽町内遺跡発掘調査報告書Ⅰ』、2003年に『浅羽町内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』を発行している)を2005年4月1日の袋井市・浅羽町との合併後も継続したもので、新たに『袋井市内遺跡発掘調査報告書Ⅰ』として発刊するものである。
- 2 本書は1996～1999年度にわたって行なわれた、旧静岡県浅羽町地内に所在する中畦横須賀堤発掘調査、大屋遺跡発掘調査、青木遺跡3次発掘調査、松下館試掘確認調査、初越居廻遺跡試掘確認調査、松原居廻遺跡試掘確認調査の報告書である。
- 3 中畦横須賀堤発掘調査は下水道最終末処理場(現アクアパーク)建設工事、大屋遺跡発掘調査・青木遺跡3次発掘調査は歩道設置工事、松下館試掘確認調査は個人住宅建設、初越居廻遺跡試掘確認調査は駐車場造成、松原居廻遺跡試掘確認調査は長屋住宅建設に先立つ調査で、いずれも浅羽町教育委員会が調査主体となって実施した。
- 4 中畦横須賀堤発掘調査は1996・97年度、大屋遺跡発掘調査は1996年度、青木遺跡3次発掘調査は1997年度、松下館試掘確認調査は1998年度、初越居廻遺跡試掘確認調査は1998年度、松原居廻遺跡試掘確認調査は1999年度にそれぞれ実施し、報告書作成業務を2005年度に実施した。
- 5 中畦横須賀堤発掘調査・大屋遺跡発掘調査・青木遺跡3次発掘調査は浅羽町単独事業として実施し、松下館試掘確認調査、初越居廻遺跡試掘確認調査、松原居廻遺跡試掘確認調査は国庫補助事業として実施し、報告書作成業務は袋井市の単独事業として実施した。
- 6 2005年度の報告書作成業務の体制は次のとおりである。
主 体 者 袋井市教育委員会 教育長 戸塚雅之
担 当 者 袋井市教育委員会生涯学習課 文化財係長 山本義孝
袋井市立浅羽郷土資料館 臨時職員(学芸員補) 鈴木仁美
事 務 局 袋井市教育委員会 教育次長 山本淳司
袋井市教育委員会生涯学習課 課長 伊藤 寛
課長補佐兼統括文化財係長 秋田勝美 文化財係長 山本義孝
主査 松井一明 主任学芸員 白澤 崇 臨時職員 鈴木寿美子
- 7 本書の執筆・編集は山本が行なった。遺構図の編集・遺物の実測・トレースは木曾昌司(2004年度浅羽町文化財担当)、鈴木仁美が、出土遺物の写真撮影は山本がそれぞれ分担しておこなった。
- 8 本書で用いた水準は海拔、方位は磁北である。
- 9 本書で用いた土色名は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『標準土色帖』にもとづいた。
- 10 調査によって出土した遺物、調査に関わる諸記録は袋井市教育委員会が保管している。

本文目次

例 言

第1章 環 境	1
第2章 調査報告	5
1 中畦横須賀堤	5
2 大屋遺跡	12
3 青木遺跡3次調査	19
4 初越居廻遺跡	27
5 松原居廻遺跡	30
6 松下館	32

図版目次

1 中畦横須賀堤	
1. 1996年度調査地全景 2. 内耳鍋出土状況 3. トレンチ1断面 溝2の土層	
2 中畦横須賀堤	
1. 1997年度調査地全景 2. トレンチ3断面(南から) 3. トレンチ4断面(南から)	
3 中畦横須賀堤	
1. 1996年度調査地深掘り部分土層断面 2. 1996年度調査地深掘り部分土層断面	
3. マガキ層近影	
4 大屋遺跡	
1. 5トレンチ北全景(西から) 2. 溝2・3完掘後(南から) 3. 西端整地土断面	
5 大屋遺跡	
1. 5トレンチ南全景(西から) 2. 5トレンチ拡張後全景(東から) 3. 中央部柱穴集中部	
6 大屋遺跡	
1. 5トレンチ北 溝1・2土層断面 2. 5トレンチ南 土坑土層断面	
3. 5トレンチ北 柱穴1・2半截状況 4. 5トレンチ北 柱穴20半截状況	
7 青木遺跡	
1. 4トレンチ全景(西から) 2. 5トレンチ全景(西から) 3. 5トレンチ土坑3	
8 青木遺跡	
1. 4トレンチ 方形周溝墓(西から、検出状況) 2. 方形周溝墓完掘後 3. 土坑1半截状況	
9 青木遺跡	
1. 4トレンチ 土坑2完掘状況 2. 溝3完掘状況 3. 溝3畦の土層断面	
10 松下館	
1. 南北断面 柱群検出状況(南から) 2. 東西断面 遺構検出状況(西から)	
3. 南北断面南端の基本土層(手前が柱穴検出状況)	
11 初越居廻遺跡・松原居廻遺跡	
1. 初越居廻遺跡 東壁土層断面(北から) 2. 初越居廻遺跡 東壁土層断面(南から)	

3. 初越居廻遺跡 北壁土層断面(南から) 4. 松原居廻遺跡 東トレンチ全景(南から)
 5. 松原居廻遺跡 北トレンチ柱穴半截状況(東から) 6. 松原居廻遺跡 南トレンチ全景(西から)
 12 中畦横須賀堤・大屋遺跡出土遺物
 13 青木遺跡出土遺物 1
 14 青木遺跡出土遺物 2
 15 青木遺跡出土遺物3・初越居廻・松原居廻遺跡出土遺物
 16 松下館出土遺物

挿 図 目 次

図 1	袋井市内遺跡の位置	1
図 2	浅羽低地を中心とした地形概念(S=1/50,000)	2
図 3	浅羽低地を中心とした主要遺跡(S=1/50,000)	4
図 4	中畦横須賀堤調査位置図(S=1/10,000)	5
図 5	中畦横須賀堤と周辺の調査区	6
図 6	中畦横須賀堤全体図	8
図 7	中畦横須賀堤土層断面図	9
図 8	中畦横須賀堤出土遺物	10
図 9	近世前期の浅羽低地と中畦横須賀堤の調査地点	11
図10	大屋遺跡トレンチ位置図(S=1/2,500)	13
図11	大屋遺跡トレンチ土層柱状図	13
図12	大屋遺跡5トレンチ全体図	15
図13	大屋遺跡5トレンチ北 掘立柱建物1実測図	16
図14	大屋遺跡出土遺物	17
図15	大屋遺跡の復元	18
図16	青木遺跡トレンチ位置図(S=1/2,500)	20
図17	青木遺跡4・5トレンチ全体図	21
図18	青木遺跡方形周溝墓実測図	23
図19	青木遺跡出土遺物(1)	25
図20	青木遺跡出土遺物(2)	26
図21	初越居廻遺跡・松原居廻遺跡・松下館の調査地点(S=1/10,000)	27
図22	初越居廻遺跡トレンチ全体図	28
図23	初越居廻遺跡出土遺物	29
図24	松原居廻遺跡出土遺物	30
図25	松原居廻遺跡トレンチ全体図	31
図26	松下館トレンチ全体図	33
図27	松下館出土遺物	34

第1章 環 境

地理的環境(図2参照)

本書で取り上げる遺跡は旧磐田郡浅羽町の東地区に所在する遺跡のため、ここでは浅羽地域を中心とした記述形式をとる。袋井市は静岡県西部(旧遠江国)に属し、南は県内で最も広い遠州海岸平野の東端から、北は磐田原台地の北端までを占め、このうち浅羽地区は市域の南端一帯を言い、通称浅羽低地と呼ばれる低湿地が8割近くを占め、田園地帯が広がる景観を呈している。

南は遠州灘に面して東西方向に砂州列が連なり、東は海拔264mの小笠山多聞天神社を最高所とする小笠山丘陵と接している。北と西は掛川市八高山より発した原野谷川の流れによって概ね区切られ、平面形が三角形状を呈している。

浅羽低地の地質の多くは粘土・炭混じりの粘土・泥炭からなる。これは、縄文前期に始まる海進現象(7000～6500年前)によって低地の下流域に海水が流れ込み、深い入り江(古浅羽海)を形成したことから始まる。海面の上昇が終わると同時に入り江奥の河川が土砂を流し込み埋め立てが盛んとなる。太田川・原野谷川のような中河川では埋め立ての力は弱く、川沿いに砂礫を堆積する程度で、まわりの入り江は濁水からの泥土を受け入れ、それが水底に堆積することとなる。本書で報告する中畦横須賀堤の調査時の深掘りグリッドにおいて、海拔-1.7m～-4.2mの範囲で確認したマガキ堆積はこの時のものである。

これと同時に海岸砂地が発達し、入り江の出口が塞がれると(縄文中期と考えられる)水域の塩分は徐々に薄くなって湖沼化し、ラグーン(潟湖)を形成する。入り江の閉塞によって河川沿いの堆積地形は保存され易くなり、原野谷川の旧本流(古川)と旧支流(古浅羽川)の蛇行流路と自然堤防が出現した。古浅羽川の出現は縄文中期～後期にかけての時期と推定されている。

古浅羽川によって古磐田海が分割されると、東に位置する小笠山丘陵の裾と、南の砂州列に囲まれた閉鎖性の強い水域が形成される。この水域(古浅羽海ともいう)は近世後期までその名残が池として残り、最後は地震に伴う地盤隆起によって消滅したと考えられている。

自然堤防は沖積低地にあっては限られた高乾地で、北部を中心に弥生時代後期以降の多くの遺跡がこの部分に集中している。

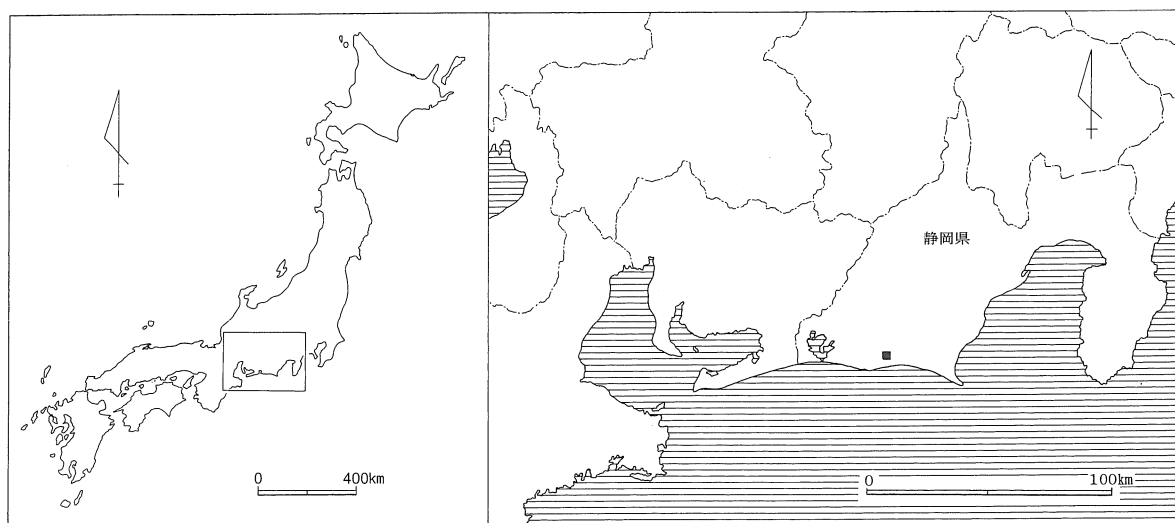


図1 袋井市内遺跡の位置

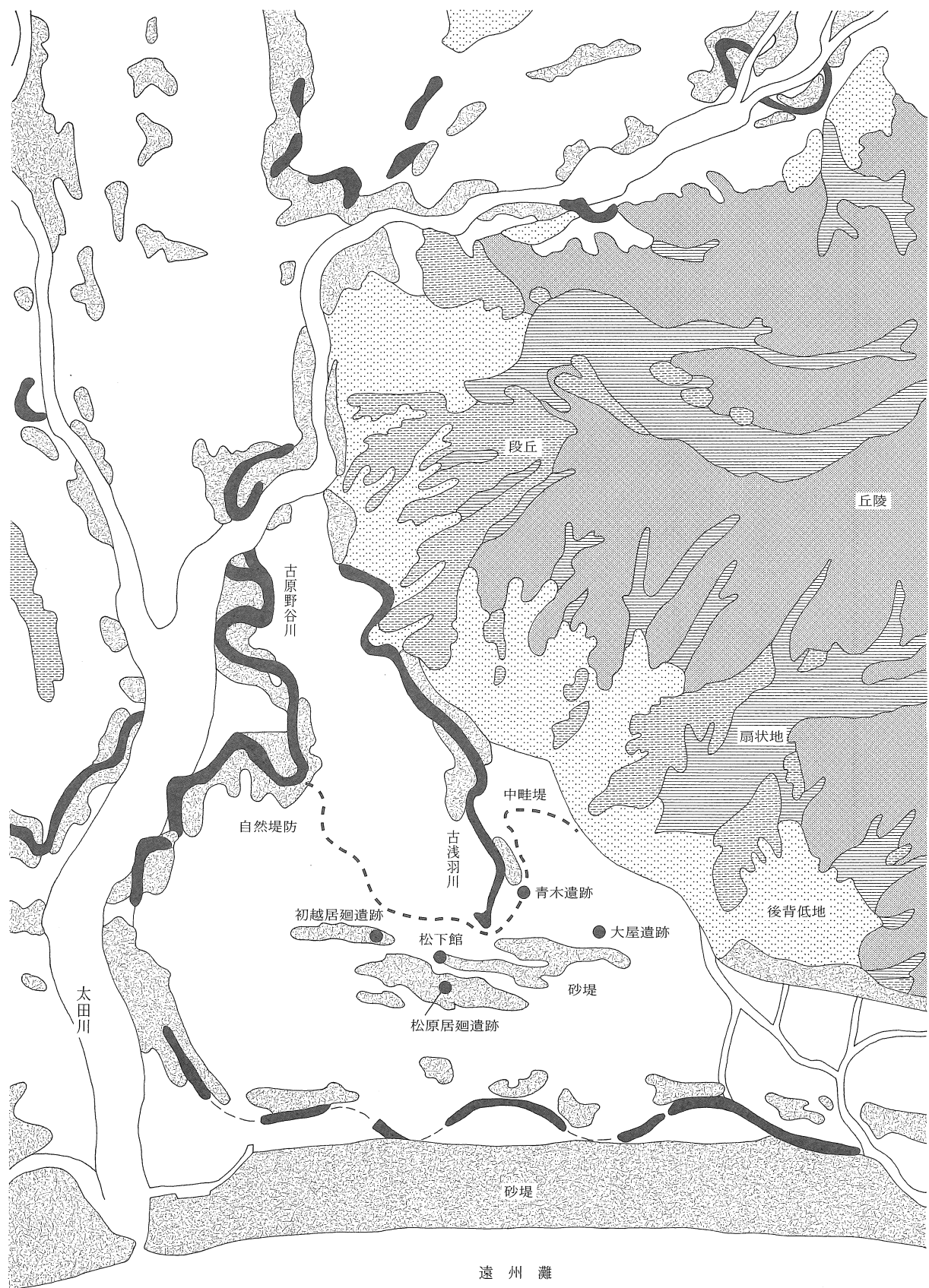


図2 浅羽低地を中心とした地形概念 (S=1/50,000)

歴史的環境（図3参照）

当報告書で扱う遺跡は東浅羽地区の6ヶ所で、古浅羽川が形成した自然堤防上に営まれた青木遺跡・大屋遺跡と、縄文海進後に形成された海岸砂州列上に営まれた松下館・松原居廻遺跡・初越居廻遺跡、これに潟湖に面して築かれた中畦横須賀堤である。

東地区の砂州上からは、縄文土器片や石錘が散発的に出土するが、明確な遺構を伴う集落は存在しないようで、小笠山段丘の裾部に営まれた大畑遺跡あたりを拠点とする集団の漁労・採取域であったと理解している。浅羽低地南部の集落形成は青木・新堀遺跡が最も古く、弥生時代後期終末から古墳時代にかけての時期まで下る。

6世紀には大きな動きが見られる。潟湖に面した北野遺跡では河川に沿って平地住居跡が見つかり、川の中から多量の須恵器と土師器が発掘された。特に須恵器は潟湖対岸に所在する衛門坂窯の製品と考えられており、一般的な集落の立地と異なる当遺跡は河川を利用した製品の流通と関わるのではないかと想定している。砂州上には浅羽低地で最大の規模を持つ地蔵山古墳(径40mの円墳)が造成される。墳丘上に円筒埴輪が並んでいたと推定され、6世紀初頭の年代が与えられている。この古墳を中心として周辺の砂州上には数基の古墳が存在し、古墳群を形成している。海岸に面した砂州上の古墳群は極めて珍しく、舟運を支配する豪族の姿を浮かべることができる。

奈良時代では新堀・北ハサマ遺跡から倉庫群、区画溝、井戸等が発掘され、区画溝に一括投機された須恵器には「山名厨」「長口」の墨書を持つ坏身が含まれ、山名郡衛に関する公的な施設の存在を伺わせる。潟湖対岸に営まれた清ヶ谷古窯跡群では遠江国分寺の瓦が焼かれており、その流通と関わる施設ではないだろうか。南部の砂州上の八幡西遺跡・権現山遺跡からは同時代の火葬墓が発掘されている。

その後一時途絶えるが、平安時代後期、11世紀辺りから自然堤防や砂州上には散在的に遺物が発見される。それは、12世紀以降、13世紀代にかけてピークを迎え、青木遺跡・大屋遺跡・馬場遺跡・宮ノ腰遺跡・権現山遺跡から遺構群が発掘されている。このうち中心を成すのが、青磁が出土する馬場遺跡である。こうした遺跡は、清ヶ谷古窯跡群における窯業生産と浅羽荘の経営と深く関わっている。

浅羽荘は遅くとも平安後期には成立した殿下渡領で、藤原氏の子弟を育成する大学、勸学院領であった。勸学院は藤原氏の氏神の春日大社、氏寺の興福寺の寺務も司る家政機関で、浅羽荘は田169町3反60歩と諸国に散在する勸学院領中最大規模を持つ荘園であった。この荘園は、室町時代には勸学院領から足利将軍家の系統、尼御所（現在の京都宝鏡寺）の寺領的性格に変化するが、荘域は殆んど変化せず、戦国期に至っている。

勸学院領浅羽荘の成立に伴い荘域の北境の柴郷と南の潟湖に面した梅山の2ヶ所に春日社が勧請され、それは馬場遺跡のすぐ南側の第一砂堤列上である。室町期には八幡社が加わり春日社は浅羽三社八幡宮と総称されるが、その中心は梅山八幡であった。馬場遺跡の成立は春日社の勧請と連動している。

参考文献

- 加藤芳郎「平野の成立と変遷」『浅羽町史 通史編』 第一編第二章第一節 浅羽町 2000年
柴田 稔「第一部考古編」『浅羽町史 資料編 考古・古代・中世』 浅羽町 1997年
『新堀遺跡』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1993年
『北野遺跡・宮前遺跡』 浅羽町教育委員会 2000年
『北ハサマ遺跡』 浅羽町教育委員会 2000年

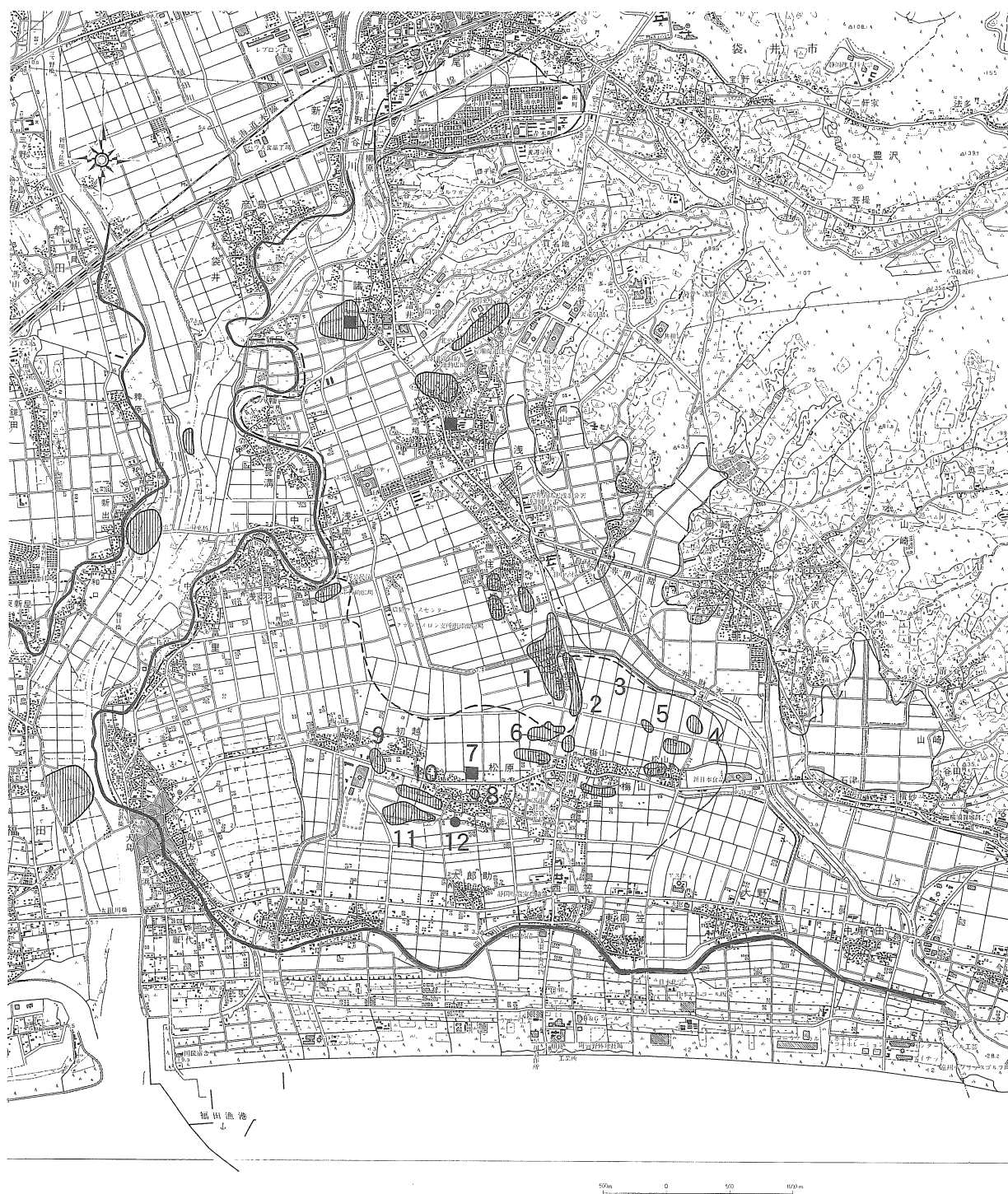


図3 浅羽低地を中心とした主要遺跡 (S = 1 / 50,000)

[東浅羽地区を中心とする主要遺跡] (番号は図3に対応)

- | | |
|----------------------------------|------------------------|
| 1 新堀・北ハサマ遺跡 (古墳時代前期、奈良～鎌倉を中心とする) | 2 青木遺跡 (本報告遺跡) |
| 3 中畦横須賀堤 (本報告遺跡) | 4 北野遺跡 (古墳時代後期) |
| 5 大屋遺跡 (本報告遺跡) | |
| 6 馬場遺跡 (鎌倉時代の拠点となる遺跡) | 7 松下館 (本報告遺跡) |
| 8 松原居廻遺跡 (本報告遺跡) | |
| 9 初越居廻遺跡 (本報告遺跡) | 10 宮ノ腰遺跡 (平安～中世の集落) |
| 11 権現山遺跡 (平安～中世の集落) | 12 地蔵山古墳 (6世紀、径40mの円墳) |

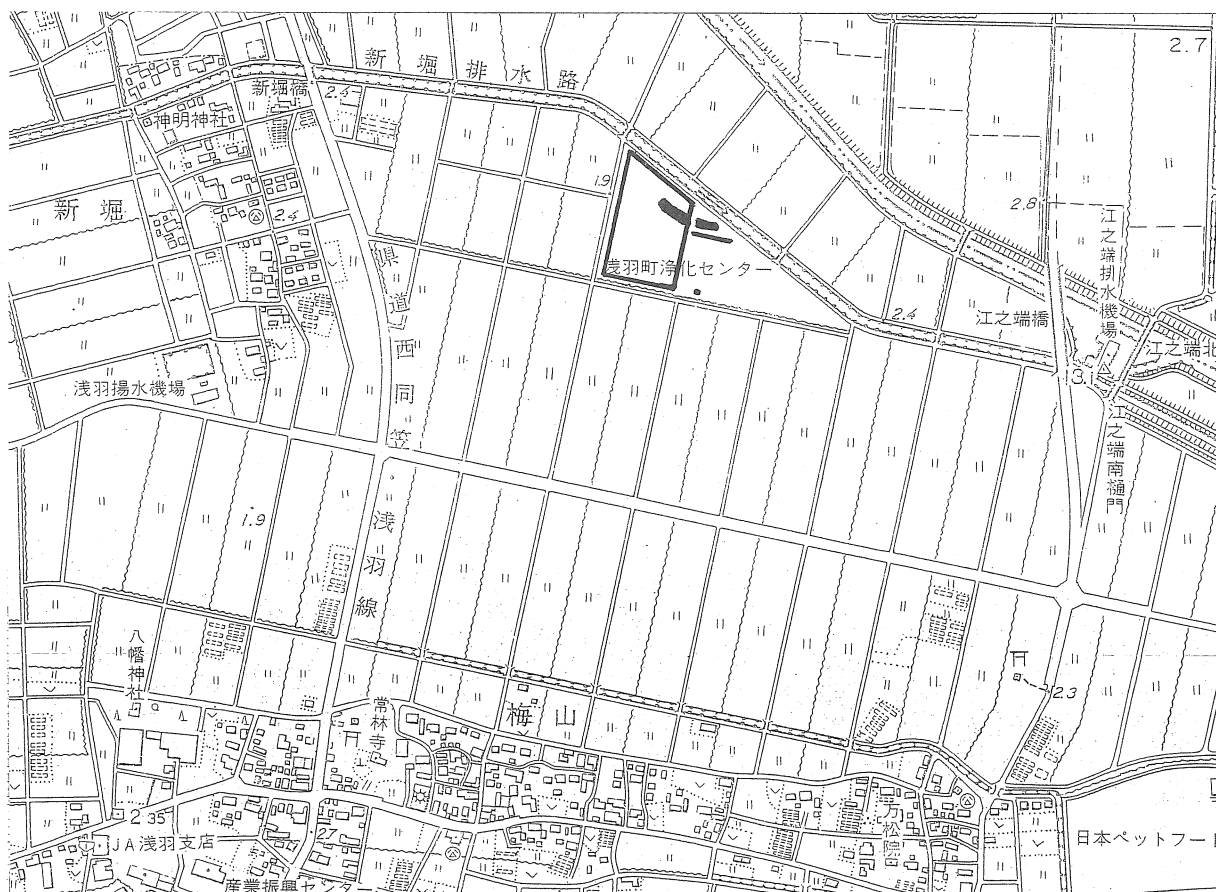


図4 中畦横須賀堤調査位置図 (S=1/10,000)

第2章 調査報告

なかうね

1 中畦横須賀堤

調査に至る経緯

浅羽町では下水道網の整備事業が本格化したことによって最終末処理場の建設が必要となり、その場所として、町内で最も標高の低い海拔1.2～1.4mで新堀排水路に接した梅山地内が選ばれた。これを受けて1995年度に事業を担当する都市計画課から社会教育課に対して埋蔵文化財有無の問い合わせがあった。

計画地内には、圃場整備が行なわれ昭和40年代に削平されるまで、中畦横須賀堤と命名された堤防の一部が存在し、これは貞享三年(1686)に作成された「浅羽上輪四ヶ村・下輪十四ヶ村水除堤相論裁許状絵図」に詳細に描かれるが、実際には中世期に遡る可能性が極めて高い堤と想定していたので、これに付随する排水路及び土盛りの基礎痕跡が確認されて堤防造営の上限を押さえる資料が得られれば、浅羽低地の開発史を考える上で重要な調査になることを説明し、調査実施に対して理解を得ることができた。

堤が存在したと推定される部分に対しては面的に調査を行い、それ以外はトレンチを設定して、現在水田となっている沖積低地の変遷を伺う資料を得る調査計画を立て、土地買収計画に合わせて1996・97年度の2ヵ年にわたり発掘調査を行なうことで合意し、都市計画課が発掘調査費を計上し、教育委員会が受託するという形をとって調査を実施した。

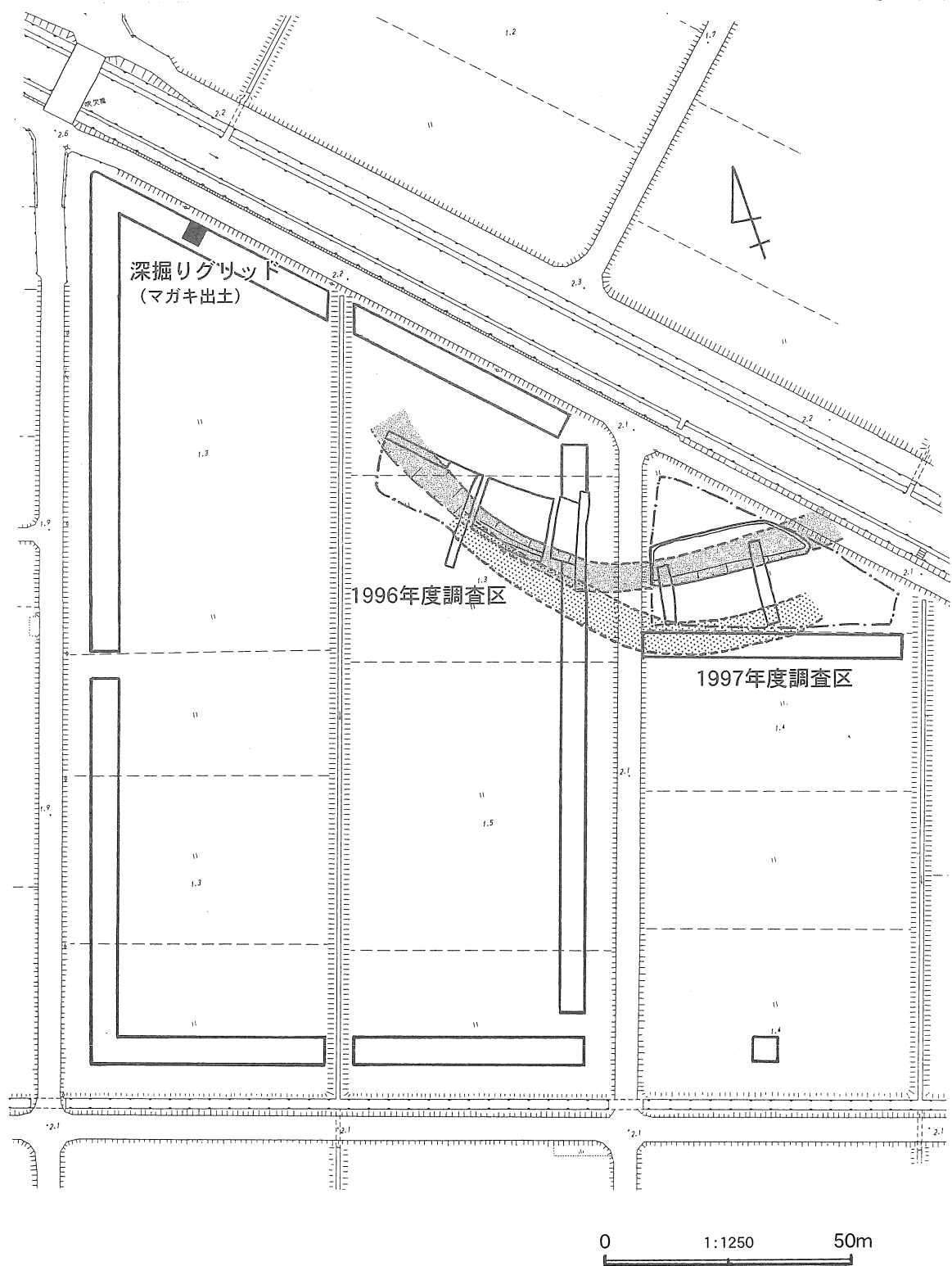


図5 中畦横須賀堤と周辺の調査区

調査経過

- 1996年12月2日 器材搬入、バックホー(0.7m³)により、トレンチの掘削を開始。
26日 年末のため作業を一時中止。
- 1997年1月7日 調査再開。
9日 堤部分の図面作成を始める。
18日 深掘りグリッドから牡蠣殻を採取する。
2月10日 器材を撤収し作業を終了する。
- 1998年3月16日 昨年確認した堤部分の東側に相当する部分をバックホーにより掘削。
18日 断面を観察するため、堤部分に直行するトレンチを2ヶ所設定する。
19日 堤部分の精査を始める。
29日 全ての作業を終え、器材を撤収しバックホーにより埋め戻しを始める。
30日 現地の埋め戻しを終える。

調査成果 (図5)

1996年度分 部分的なグリッドを設けたのでは、用排水に用いられた溝などの痕跡を見落とす可能性が考えられたので、計画地の外周に沿って5m幅でトレンチを設定し、田面の床土を除去し遺構の発見に努めた。これによって東北隅に溝2条分と地山土を盛り上げた堤防の基礎部分を確認し、その部分は拡張した。新堀排水路に沿った部分では深掘りを実施し、田面下5.6mまで掘削し、海拔-1.7~-4.2mの範囲で牡蠣殻の堆積層を確認した(図版3)。

1997年度分 この年度は昨年の調査で残されていた堤防の東部分に対して行ない、約850m²を掘削し、堤防に伴う溝と堤防の基礎部分を確認した。さらに前年度の調査で確認した溝の南側でもう一条の溝を確認し、溝の切り合い関係から南から北に移動しながら二次期の堤防が造成されていたことが想定された。

堤防跡 (図6~7、図版1~3) 2年度分を一括して報告する。堤防に伴う溝は2条確認され、北側を溝1、南側を溝2とする。96年度調査区では溝1が溝2を切っている状況が確認できた。

両溝は堤防の盛土に対して内側に沿って掘削され、同じ形態の溝は東浅羽地区の浅羽大囲堤でも確認されている¹⁾。ただし、溝は堤防の外側に存在した。両溝共に南側に大きく弧を描いて東西方向に延びており、調査では溝1を約90m分、溝2を約80m分確認し、4ヶ所のトレンチを設定して断面観察を中心とした調査を行ない、一部を掘削した。以下がトレンチの所見である。

トレンチ1断面 この断面では溝が3条分確認でき、溝2→溝1→溝3の順に掘削されたと考えられる。

溝1は当断面だけで全域が確認された。幅7.2m、深さ70cmの規模で断面形は緩やかな弧を描く。遺構内覆土は上下2層に分かれ、上層が緑灰色粘土(10GY6/1)、下層が暗青灰色粘土(10GY3/1)。溝の北側で削平されずに残った盛土、にぶい黄橙色土(10YR6/4)を確認した。遺物No2の内耳鍋はこの土層の下部からの出土である。

溝2は南北両肩を溝1・3に切られ、深さ90cmある。遺構内覆土は上下2層に分かれ、上層が青灰色粘土(5PB5/1)下層が暗灰色粘土(N5/0)。

溝3は断面が矢研堀状になり、深さ1.8mある。遺構内覆土は北寄りの肩付近から遺物No1の山茶碗が出土したが、溝自体は近代まで下と考えている。井戸は圃場整備直前まで存在したと考えられ、ちょうど一部にコンクリートを用いた井戸枠が断面にかかった状態で見つかった。

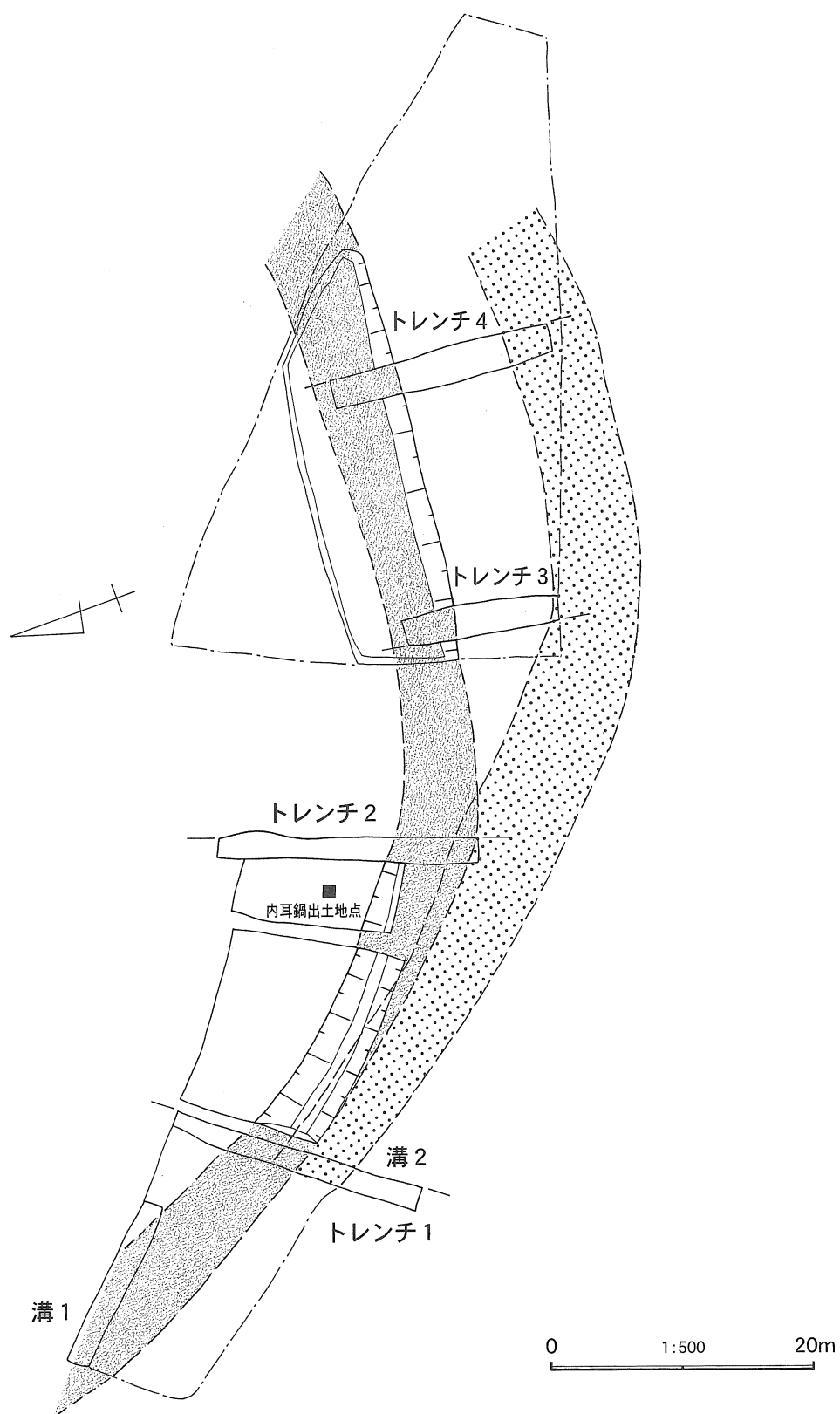


図6 中畦横須賀堤全体図

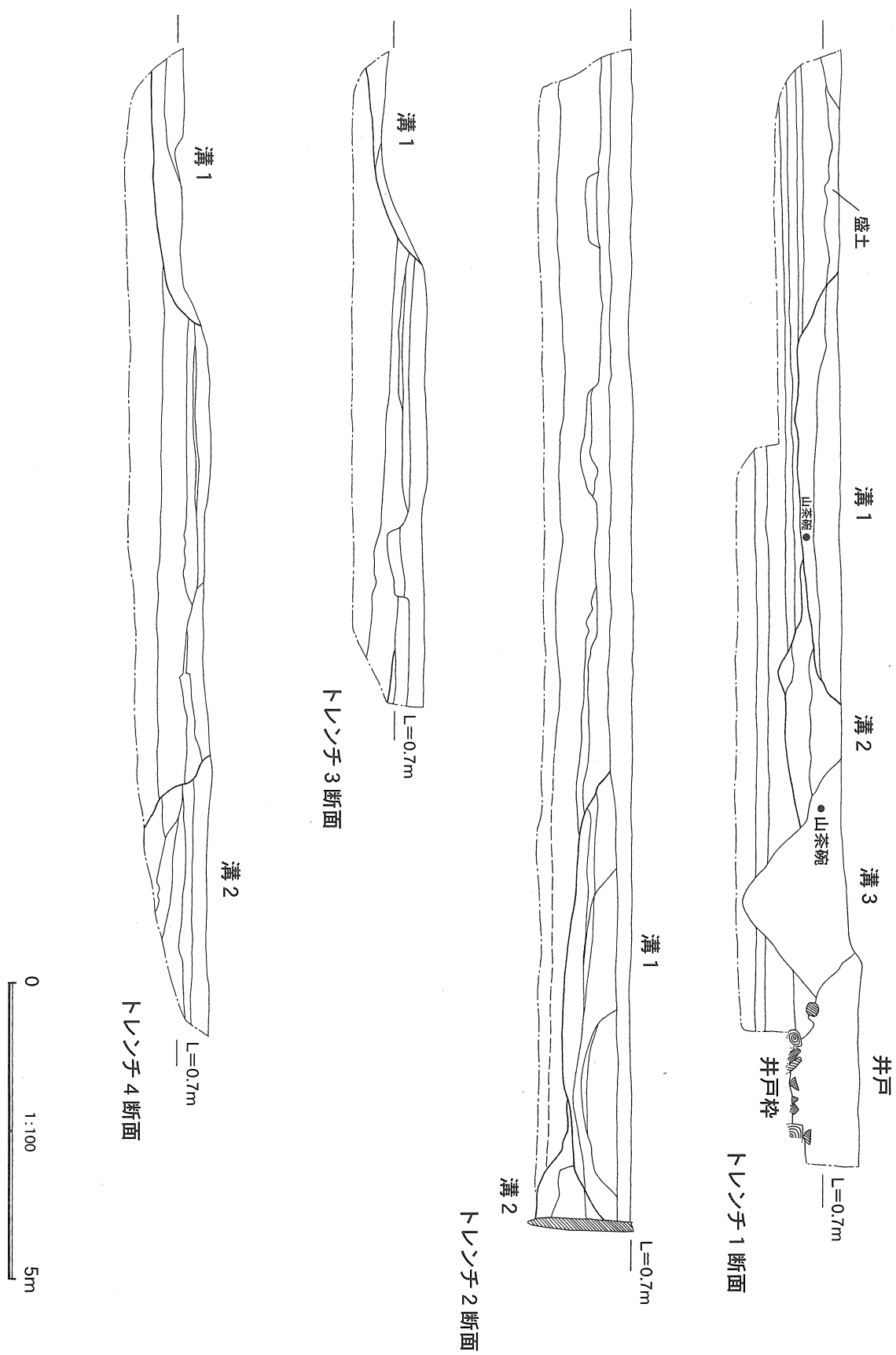


図 7 中畦横須賀堤土層断面図

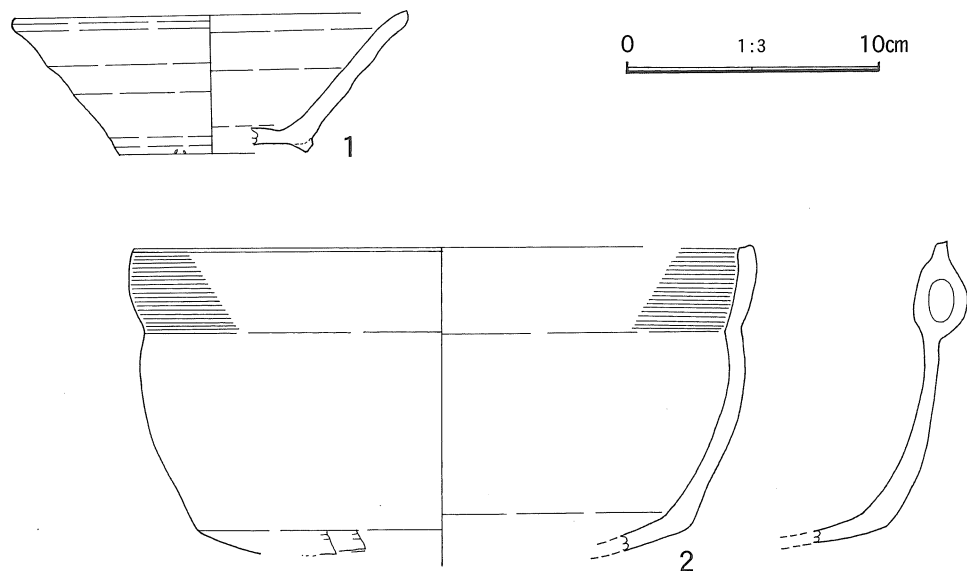


図8 中畦横須賀堤出土遺物

トレンチ2断面 この断面では1トレンチで確認した溝1の続きを再確認した。深さ90cmあり、埋没後2度、幅を狭めながら再掘削を受けている。南端で長さ1.8m程の杭を確認した。東西方向に延び、隙間無く打ち込まれているが、最初の再掘削に伴う近代のものではないだろうか。溝1の南下で溝の肩と見られる土層の傾斜を確認した。溝2の続きであろう。

トレンチ3断面 この断面では溝1の続きを確認した。

トレンチ4断面 この断面では溝1・2の続きを確認した。溝2は調査区の南側に広がり幅を確認することができなかったが、深さ1.2mまで掘削した。

遺物 (図8、図版12)

遺物は3点しかなく、いずれも1996年度調査区内から出土した。

1は知多・猿投産山茶碗で6型式、13世紀前半の所産で高台に粗殻痕がある。残存率30%。内部に使用痕が認められない。トレンチ1断面の溝2内から出土した(出土位置は断面にドットで表示)。

2は内耳鍋、16世紀後半～17世紀初頭の所産。残存率30%。トレンチ2の西側、堤防盛土の基底部から出土した(図6に出土地点表示)。これは溝1に伴う堤防の基底部に相当する。あと1点は山茶碗の細片でトレンチ1断面の溝2内から出土した。

総括

海拔-1.7m～-4.2mで確認したマガキの貝殻の炭素14年代は5190年±70年、5060年±70年(地球科学研究所測定)と出ており縄文時代前期末頃に相当する。青色粘土中のマガキ礁の存在はそこが当時湾奥の泥底であったことを示し、縄文海進に伴いこの時期まで海水が深く入り込んでいたことを裏付けている。

今回の調査で堤防の上限を直接示す資料を得ることはできなかったが、2度の調査結果を突き合わせることによって、中畦横須賀堤が2時期存在することが判明した。残念ながら溝2に伴う堤防の築堤時期は不明だが、出土した2点の山茶碗の時期まで一気に溯らせることはできない。但し、13世紀代に潟湖に面した湿地の開発に手を付けたのは確実であろう。

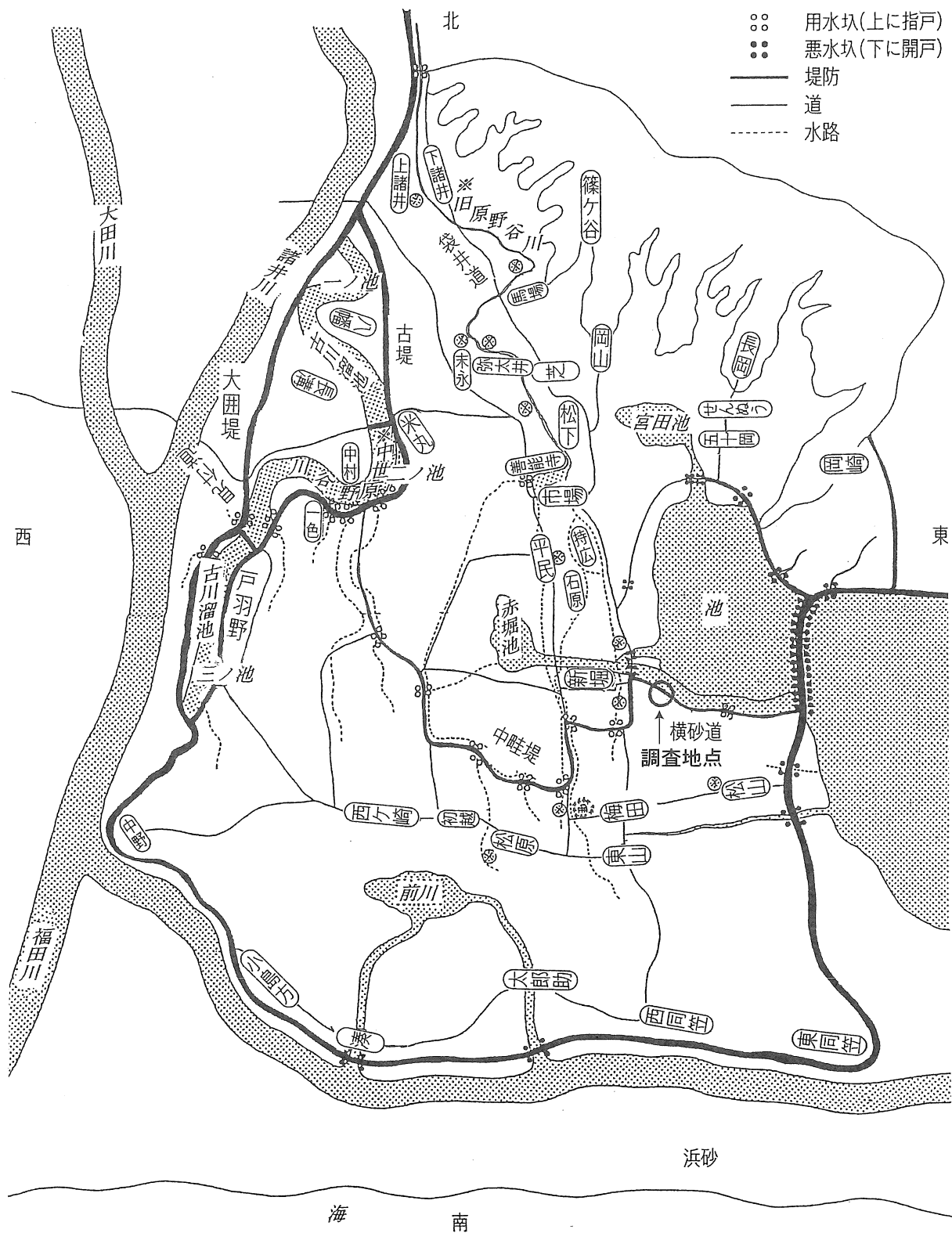


図9 近世前期の浅羽低地と中畦横須賀堤の調査地点

(黒線は堤防 中畦堤・古堤・浅羽大田堤)

貞享3年裁許絵図をもとに作成『浅羽町史通史編』より

溝1に伴う堤防の構築年代は出土した内耳鍋から16世紀後半～17世紀初頭と考えられ、その時期浅羽低地では大規模な治水に関する造成が行なわれている。低地の西側を蛇行して流れる原野谷川の度重なる洪水を防ぐために、太田川との合流工事が行なわれて両河川の線形は大きく変り、旧浅羽町域西端の中村で合流し、直線状に遠州灘へ注ぐようにした。この河川合流工事は幕府の代官頭として遠江支配に関わっていた伊奈忠次によって行われ、慶長9年(1604)に完成している。

これに伴い、掘削で生じた大量の土砂を河川に沿って積み上げて浅羽中を囲い、総延長13kmに及ぶ浅羽大囲堤が出現した。それより以前から存在する中畦堤を東と西の2ヶ所で大囲堤と連結させており、この時に規模を大きくして、造成し直したと考えられる。

註 1) 『北野遺跡・宮前遺跡』浅羽町教育委員会 2000年 本文9・10頁、図版7・10

2 大屋遺跡

調査に至る経緯

浅羽町建設課では、東西に走る町道下富松山線に対して、1996年度に南北両側に歩道を設置する計画が具体化し、社会教育課に埋蔵文化財所在有無の確認があった。社会教育課では工事予定範囲内には自然堤防が存在し、計画範囲の東側ではあるが、類似する地形環境の自然堤防上に宮前遺跡が存在することから、ここに遺跡が存在する可能性が高いと判断し、掘削の及ぶ歩道部分に対して全面的な試掘確認調査を実施して遺構確認を行ない、遺構が確認された場合には面的な発掘調査を実施することで合意し、町単独事業として社会教育課の予算に試掘確認調査費を計上した。

試掘調査の結果、5トレンチから遺構が集中して確認され、小字の名称から大屋遺跡と命名し、ただちに面的調査に切り替え対応した。

調査経過

- 1996年10月18日 大屋遺跡調査開始 器材類を搬入する。道路をはさんで東西方向に、幅2m分のトレンチを設定。バックホーにより、表土の掘削を始める。
東側から順に、1トレンチ南・北～7トレンチ南・北と名付ける。
- 22日 5トレンチ南・北で複数の柱穴、溝を確認。
- 24日 1～7トレンチまでバックホーによる表土の削平を終わる。この段階で、遺構は5トレンチ南・北だけに存在することが判明し、以後の作業を5トレンチに集中する。
- 25日 バックホーを用い5トレンチ以外を埋め戻す。
- 28日 5トレンチ北の遺構群の掘り下げを開始。
- 29日 5トレンチ北の西端で整地土層を確認。
- 30～31日 これまでの作業で確認した遺構群の全景を記録するため、南・北各トレンチごとに、撮影を行う。
- 11月5日 5トレンチ南・北の平面図作成開始 (S=1/20)
- 6日 浅羽町建設課、建設委員の現地視察。
- 12日 遺構面保護のため、砂を敷く。
- 13日 5トレンチで確認した遺構群の平面プランを出来る限り明確にするため、遺構が集中する部分に対し、調査範囲を広げる。

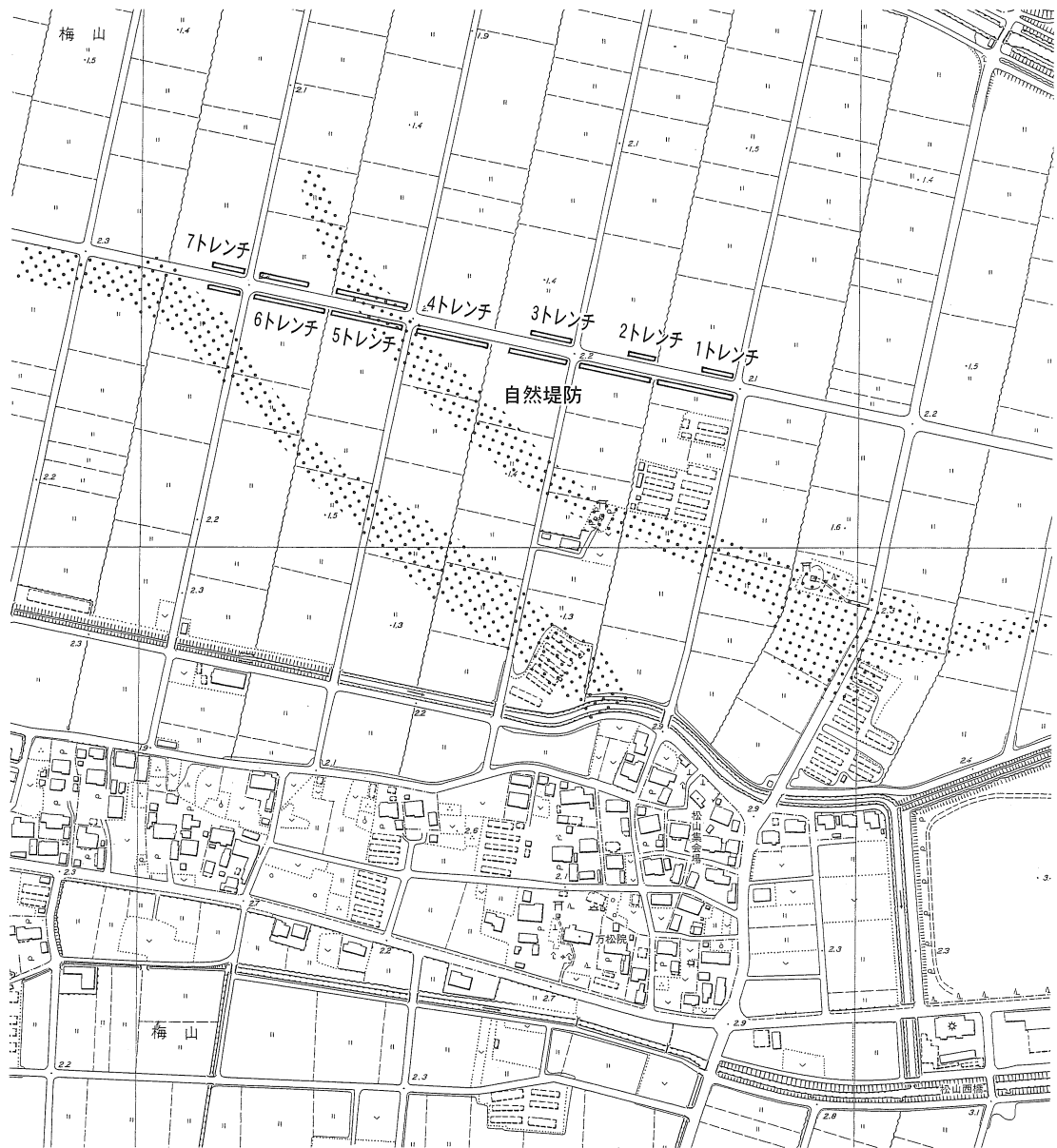


図10 大屋遺跡トレンチ位置図 (S=1/2,500)

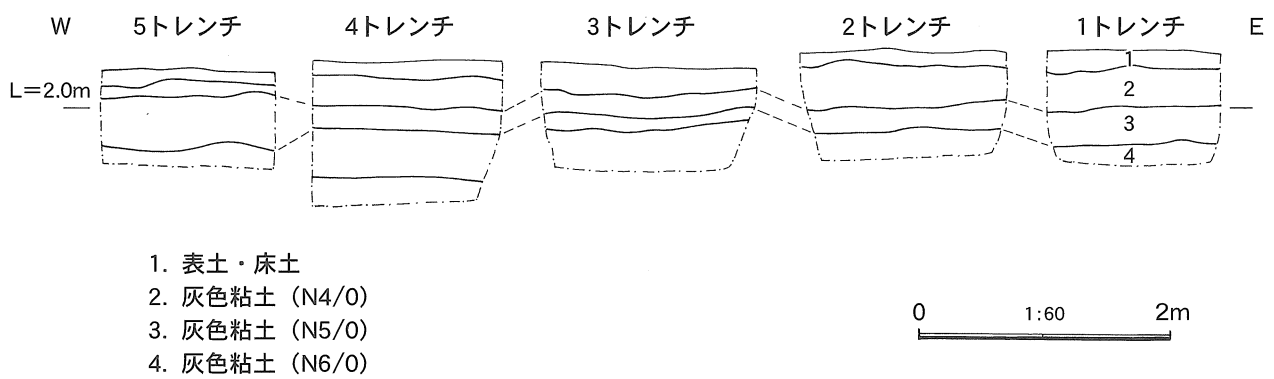


図11 大屋遺跡トレンチ土層柱状図

18日 浅羽町史編纂委員・静岡大学名誉教授の加藤芳郎氏が地質調査を行なう。

19～20日 拡張部を含め、トレンチの全景撮影を行ない、平面図も追加する。

26日 5トレンチ南の土坑を半截する。調査は、遺構が破壊される側溝部分の遺構は全掘、保護される歩道路面部分は、2～3cmほど遺構の輪郭を掘り下げ、必要に応じて半截し、断面観察を行なうようにした。

29日 作業を終了し、遺構が保存される部分に対しては全面に砂を被せ、器材の撤収を行なう。

各トレンチの概要

調査はバックホーで田面の表土・床土を削り、その後は徐々に平面的に掘り下げ、遺構の発見に努めた。床土の下は灰色粘土となり、下層には有機質を含んだ灰色粘土が堆積している。遺構は5トレンチだけに存在し、確認面は灰色粘土上面と浅い。遺構が確認できなかったトレンチでは1～1.5m四方ほどのグリッドを設定し、田面より60～80cm掘り下げ土層断面図を作成し、主なものを図示した。

1トレンチ 北側2×24m、48㎡、南側2×50m、100㎡の範囲を掘削。遺構無し。

2トレンチ 北側2×15m、30㎡、南側2×50m、100㎡の範囲を掘削。遺構無し。

3トレンチ 北側2×29m、58㎡、南側2×30、60㎡の範囲を掘削。遺構無し。

4トレンチ 南側2×51m、102㎡の範囲を掘削。遺構無し。

5トレンチ 北側2×50m、100㎡、南側2×50m、計200㎡の範囲を掘削。全面にわたって遺構が確認されたので、精査を行なった。

6トレンチ 北側2×33m、66㎡、南側2×50m、100㎡の範囲を掘削。遺構無し。

7トレンチ 北側2×26m、52㎡、南側2×26m、52㎡の範囲を掘削。遺構無し。

調査成果

概要 5トレンチの調査の結果、トレンチ北からは溝4条、西端から整地土層1ヶ所、柱穴27穴を、トレンチ南からは溝3条、柱穴64穴、土坑1基を確認した。このうち両トレンチ東端から見つかった溝は、その方向と位置から連結する同じ溝であると判断し、調査を進めた。

確認できた多数の柱穴はトレンチの幅が狭く、掘立柱建物1としたもの以外は、明確には出来なかったが、想定できそうなもの6棟分を図示した。

具体的な掘削では、排水溝が設置される部分に該当する遺構は完全に掘削したが、それ以外は遺構本体に掘削による破壊が及ばないので、遺構の認識と、上面だけの掘削にとどめ、地中に保存した。

【トレンチ北の遺構】

溝 (図12, 図版4・6) 溝1～溝3および溝4はいずれも北西から東南方向に向い、このうち溝1～溝3の3条は並行して設けられている。

最も東側の溝1は幅1～1.2m、深さ10～20cmで、北西に向ってレベルが低くなっている。

溝2は幅45～50cm、深さ10cm前後で、平面では確認できなかったが土層断面では二条の溝が重なっている。新段階溝の遺構内覆土は明黄褐色粘質土(10YR6/8)、古段階溝の遺構内覆土は黒褐色粘質土。

溝3は幅45～50cm、深さ12～3cmあり、遺構内覆土は下層が明黄褐色粘質土(10YR6/8)、上層が黄褐色粘質土でここから数点の灰釉陶器、山茶碗片が出土している。

溝4は幅70cm～105cm、深さ14～15cm前後で、切り会い関係から整地土より新しく、掘立柱建物1よりも新しい。遺構内覆土は褐色粘質土(7.5YR4/6)。

整地部分 (図12, 図版4) 5トレンチ北の西端で確認し、北へ拡張したトレンチ内で幅2m分だけ部分的に掘り込み、遺構検出面から1m掘り下げたが底を確認できなかった。自然堤防の肩の線を出

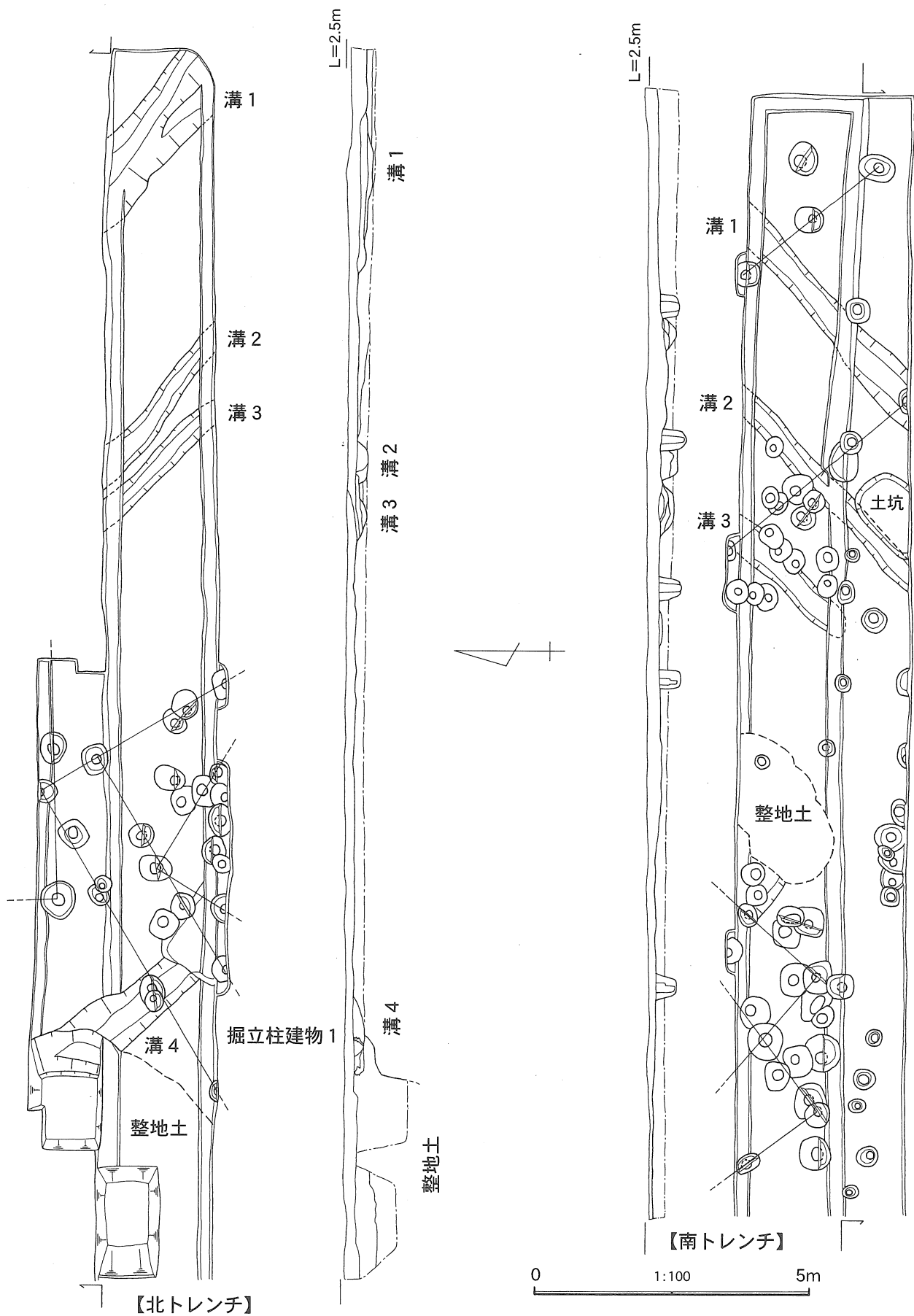


図12 大屋遺跡5トレンチ全体図

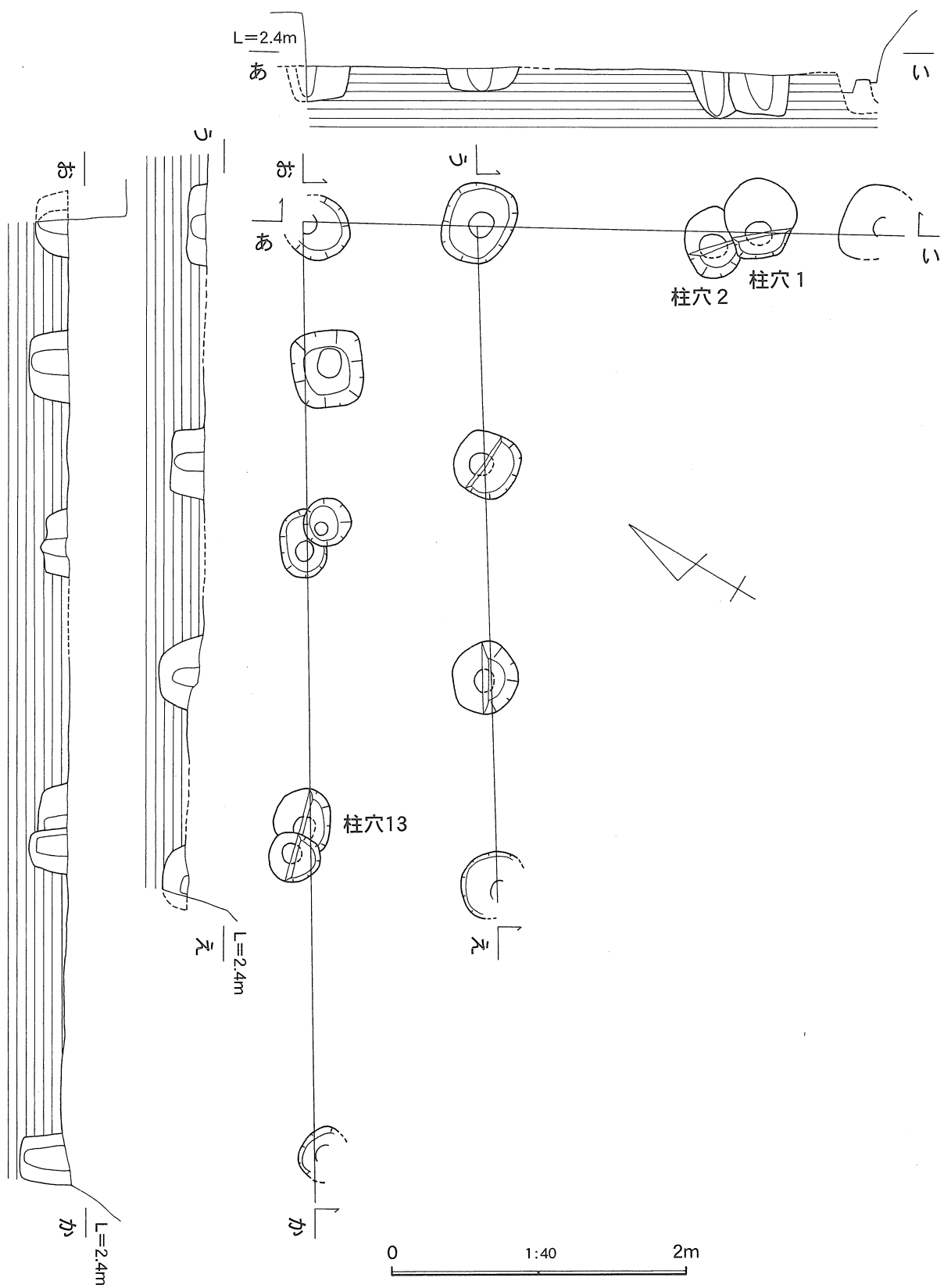


図13 大屋遺跡5トレンチ北 掘立柱建物1 実測図

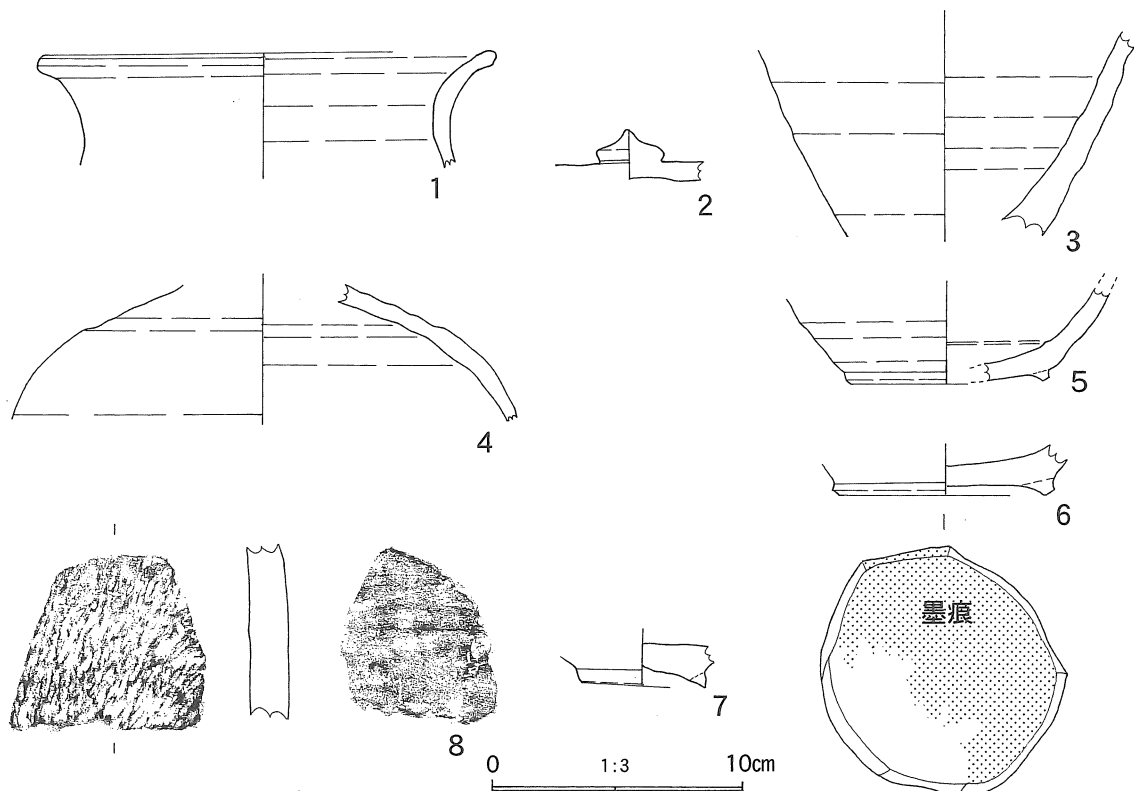


図14 大屋遺跡出土遺物

したがマイナス30cmから下は急に立ち上がっている。整地土層は2層に分かれ、上層は黄褐色粘質土(10YR7/8)、下層は青灰色粘質土中に無数の灰色粘土のブロック土が混入し、一気に埋められたものであることがわかる。

掘建柱建物 1(図13, 図版4) 身舎の東西両側か、西側片方向にのみ庇が伴う掘建柱建物跡と推定して復元を試みた。桁行3間以上、梁行2間以上の身舎部分と、北西側で3間以上の底部分を調査したことになる。建物の棟方位はS-58°-W。

柱穴の平面形は隅丸方形が基本で、底部分の差し替えた柱穴は小降りで円形になっている。身舎部分の柱穴規模は40~50cm程度、底部分は30~40cmと一回り小さい。覆土は柱掘り方内が黄橙色粘質土(10YR7/8)、柱痕跡部は黒褐色土(2.5Y3/1)と柱痕跡の確認は容易であった。

【トレンチ南の遺構】

溝(図12, 図版5) 溝1~溝3はいずれも東北から南西方向に向い、3本は並行して設けられている。これらの溝は、5トレンチ北の3条の溝と対称的な配置となっており、道路の下で直行し連結するものと想定される。

溝1は幅50~85cm、深さ20cm前後で、南西から東北方向へ緩やかに傾斜している。遺構内覆土は上層が黄褐色粘質土(10YR5/6)、下層が褐色粘質土(10YR4/6)。

溝2は幅40~50cm、深さ20cm前後で、遺構内覆土は上層が黄褐色粘質土(10YR5/6)、下層が褐色粘質土(10YR4/6)。

溝3は幅50~70cmで、深さは北端でも5cmと浅くトレンチの中ほどで立ち上がり消滅している。遺構内覆土は灰黄褐色土(10YR4/2)。

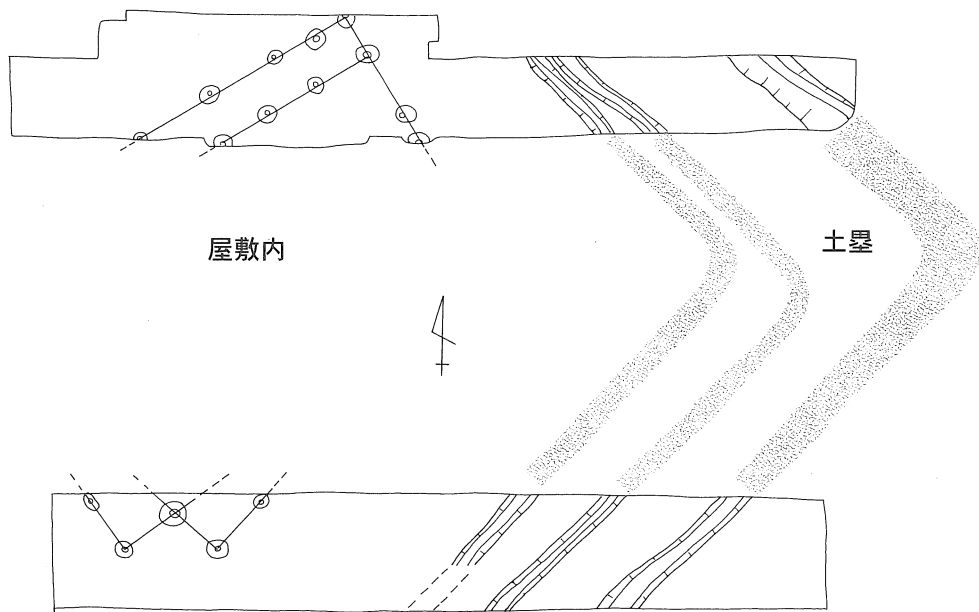


図15 大屋遺跡の復元

整地部分（図12，図版5）南トレンチの中央付近で確認し、整地土を取り除くと深さ25cm前後の窪地となった。北トレンチ西端で確認した整地造成が行なわれた時のものであろう。

土坑（図12，図版6）幅1m、長さ1.5m程、深さ60cmの規模を持つ土坑で、南端が調査区の外側に及んでいる。壁は垂直に立ちあがる。遺構内覆土は黄橙色砂質土に地山のブロックが混入し、一気に埋められたものと判断される。形状から土壌墓と推定している。遺構内覆土からは土師器の細片のみ出土した。

遺物（図14，図版12）

5トレンチからは、パンコンテナケースに換算して半箱分の遺物が出土したにすぎない。その内訳は土師器の細片が僅かに含まれるだけで、あとは奈良時代の須恵器、灰釉陶器、山茶碗類が占め、その中でも山茶碗類が最も多い。殆どが包含層からの出土で、遺構に伴うものは数点にすぎない。

1は土師器長胴甕の口縁部で器表の摩滅が激しい。坂尻Ⅱ-1期、7世紀初頭の所産、包含層からの出土。2は須恵器蓋、8世紀前半、湖西産か、南トレンチ中央整地土内出土。3は奈良時代須恵器の長頸壺の胴下部、表面に火ダスキが見られる。北トレンチ溝1から出土。4は広口壺の肩部、清ヶ谷産か。Ⅲ期、O53並行期、10世紀前半に相当する。北トレンチ掘建柱建物1に伴う柱穴13から出土。

5・6は渥美・湖西産Ⅱ期の山茶碗、12世紀後半～13世紀初頭。6は内面に墨痕が残る。7は清ヶ谷Ⅳ-4期の灰釉陶器、11世紀後半。8は清ヶ谷産の瓦、Ⅳ-4期。5～8は北トレンチ東側の包含層より出土。

総括

新規発見の大屋遺跡は図10で示したように幅50mにも満たない自然堤防上に営まれた遺跡で、一部古墳時代の遺構、奈良時代の遺物が見られるが、概ね11世紀～13世紀を中心とする遺跡である。

そこには狭い微高地上に数回にわたり建て替えられた掘建柱建物跡が集中する。中心は13世紀代と考えられ、窪地に土を入れて整地し、屋敷地の区画溝と考えられる並行する溝は、その形態から方形館と推定される。北トレンチの溝は自然堤防が延びる方向に並行しており、地形に制約されながら、

最大限の敷地を確保しようとしたものであろう。浅羽低地でこれまでに確認された同時期の屋敷には馬場遺跡第2地点F11、E8¹⁾、宮ノ腰遺跡のように回りに並行する2条の溝を回すものがあり、水害対策としての僅かな土盛りを伴う土塁が存在したのであろう。大屋遺跡の在り様は、同じ低地での小さな自然堤防上の遺跡である馬場遺跡に類似し、潟湖に面した浅羽低地の開発史を語っている。

註 1) 『青木、馬場第1・第2遺跡』浅羽町教育委員会 1984年

3 青木遺跡 3次調査

調査に至る経緯

浅羽町建設課では、東西に走る町道下富松山線の南北両側に歩道を設置する事業を1996年度から着手し、東側から順次工事が進められることとなった。社会教育課ではこれに先立つ試掘確認調査を行ない、埋没している自然堤防上に大屋遺跡を発見し、緊急に発掘調査を実施した。その内容は2節で報告した。

翌1997年度は県道浅名同笠線と交差する東西225m分が着工されるので、これに先立って青木遺跡の範囲内で発掘調査を実施する必要が生じ、社会教育課の当初予算に計上して工事の日程に合わせて現地調査を進めることとなった。

調査経過

1997年9月19日 調査開始。歩道設置部分に幅2mのトレンチを設定し、バックホーにより表土の掘削を始める。1～4トレンチの表土掘削は22日に終了。

10月1日 4トレンチで遺構を数ヶ所確認したので、精査を始める。

3日 4トレンチで周溝墓と考えられる溝、溝、土坑を確認。周溝墓の溝内から出土する土器の出土状態図を作成。各遺構の精査を進める。

8日 最後まで残っていた5トレンチを設定し、バックホーによる表土の掘削を始める。5トレンチでも遺構が確認されたので、精査を進める。平面図の作成にかかる。

14日 4・5トレンチを清掃し、ローリングタワーを組んで全景写真の撮影を行なう。器材を撤収し、調査を完了する。

調査成果

概要 2トレンチでは溝1条を確認し、溝1と通し番号を付けたが、図を省略した。土層断面から幅2.6m、深さ10cmの規模を持つ。その他の遺構は全て4・5トレンチで確認した。4トレンチ中央西寄りからは、方形周溝墓と推定される溝状遺構1基（ここでは方形周溝墓として報告する）、東側からは溝2条、土坑2基を、5トレンチからは土坑1基、溝2条を確認した。

【4トレンチの遺構】

方形周溝墓（図18，図版8） この遺構は、最初平面的に土色の違いとして範囲が認識しづらく、土器片が集中する箇所を手がかりに畦を2ヶ所残して掘り下げ、トレンチの壁の土層断面と合わせて断面で確認しながら溝の輪郭を確定した。溝の幅2～2.1m、深さ15～20cmの規模を持つ。遺構内覆土は二層に分かれ、上層は薄くマンガンを多く含んだ褐色粘質土(10YR4/6)、下層は黄褐色粘質土(10YR5/6)だが、地山との識別は難しい。遺物は上層内から弥生土器片が集中して出土し、壺・台付甕・高坏の各器種が見られる。

溝（図17，図版7・9） 溝2は南北方向に走る溝で、溝3によって北半分が切られている。幅75cm、深さ35cm前後の規模を持ち、長さ2m分を発掘したにすぎない。遺構内覆土は上下2層に分かれ、



図16 青木遺跡トレンチ位置図 (S=1/2,500)

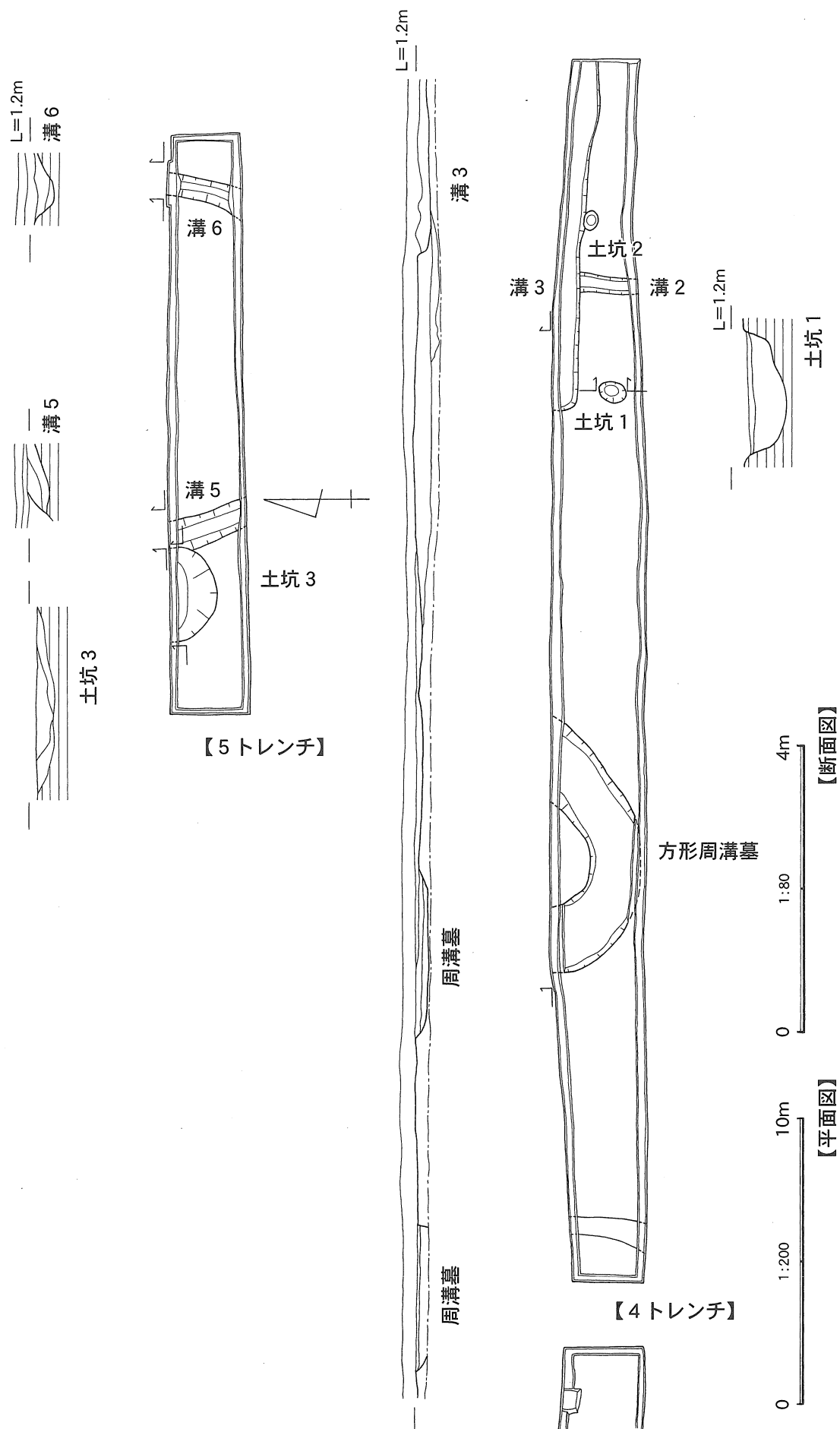


図17 青木遺跡4・5トレンチ全体図

上層が灰黄褐色粘質土(10YR4/2)とにぶい黄褐色粘質土(10YR5/4)、下層が明黄褐色粘質土(10YR6/8)に褐灰色粘土(10YR6/1)のブロックが混入する。

溝3は東西方向に走る溝で、北側の肩の多くがトレンチ北壁の外に出るが、東寄りで幅55cmの規模を持ち、深さ20cmある。遺構内覆土は褐色粘質土(10YR4/1)で、山茶碗を中心に灰釉陶器片が数点出土した。

土坑 (図17, 図版8・9) 土坑1は85cm×70cm、深さ25cmの規模を持つ楕円形の土坑。遺構内覆土は上下2層に分かれ、上層がにぶい黄褐色粘質土(10YR4/3)、下層が黄褐色粘質土(10YR5/6)、高坏脚部片を含む弥生土器の細片が出土した。

土坑2は北側で溝3に切られている。50×65cm、深さ40cmの規模を持つ楕円形の土坑。遺構内覆土は3層に分かれ。大半を占める上層が暗褐色粘質土(7.5YR3/5)、下層上部が灰色粘土(N5/0)で土師器細片が出土した。下部が灰白色粘土(N7/0)

【5 トレンチの遺構】

溝 (図17, 図版7) 溝5は土坑3に一部切られている。北西に振れながら南北方向に延びる溝で、幅1.1m、深さ35cm。遺構内覆土は上下2層で、両層ともににぶい黄褐色砂質土(10YR5/4)で、下層は粘性が強い。土師器片が出土している。

溝6は東北に振れながら南北方向に延びる溝で、幅80cm、深さ30cm。遺構内覆土は上下2層で、両層とも褐灰色粘質土(10YR6/1)で、上層はマンガンを多く含む。溝3の覆土に類似し山茶碗の細片が出土した。

土坑 (図17, 図版7) 土坑3は土坑本体がトレンチの北側に広がり、南端の部分に相当する。トレンチ北壁で幅3.3mの規模を持つ円形の土坑。深くなるので工事の掘削が及ばない深さ以上は掘り下げていない。遺構内覆土は2層まで掘り込み、上層が褐灰色砂質土(10YR5/1)で炭を多く含み、土師器の殆どがこの土層から出土した。下層がにぶい黄褐色粘質土(10YR5/3)。

過去の青木、新堀遺跡の発掘調査で確認された円形・楕円形を呈する祭祀土坑と理解している。

遺物 (図19・20, 図版13~15)

青木遺跡の調査では、パンコンテナケースに換算して2箱分の土器が出土した。この内、70%ほどが弥生土器で、わずかに土師器が含まれる。弥生土器の大半は方形周溝墓の溝に伴い、あとは包含層から出土した。土師器は主に土坑3から数片出土した。残りは古墳時代・奈良時代の須恵器、灰釉陶器、山茶碗、中世陶器類で、山茶碗片の出土量が最も多く、包含層からはわずかに出土し、半分は溝3から出土した。

1～5・9が壺、いずれも状態が悪く殆ど摩滅して調整などが不明瞭だが1・2・4は肩部に羽状文が観察できる。1・9は折返し朝顔口縁壺。1～5が方形周溝墓の溝から、9は包含層から出土した。6は台付甕の脚部、方形周溝墓の溝から出土。7は甕、摩滅が激しく端部の刻み目がかろうじて観察できる。方形周溝墓の溝から出土。8は高坏脚部、三方向に突孔を持ち表面にミガキが見られる。方形周溝墓の溝から出土。10は台付甕の脚部、土坑3から出土した。

1～7は弥生時代後期後半の最終段階に、8～10は古式土師器Ⅰ-1期に相当すると考えられる。11・13は渥美・湖西産の輪花碗でⅠ-1期、12世紀前半～半ばの所産、溝3から出土。12は清ヶ谷産の輪花碗でⅠ-1期、溝3から出土。14は渥美・湖西産の山茶碗でⅡ期、溝3底直上より出土。15～17は渥美・湖西産の山茶碗Ⅰ-1期、溝3から出土。18・19は渥美・湖西産の小碗、Ⅰ-1期、溝3から出土。20は東遠江産山茶碗の小皿、Ⅲ-1期、13世紀前半の所産、溝1から出土。

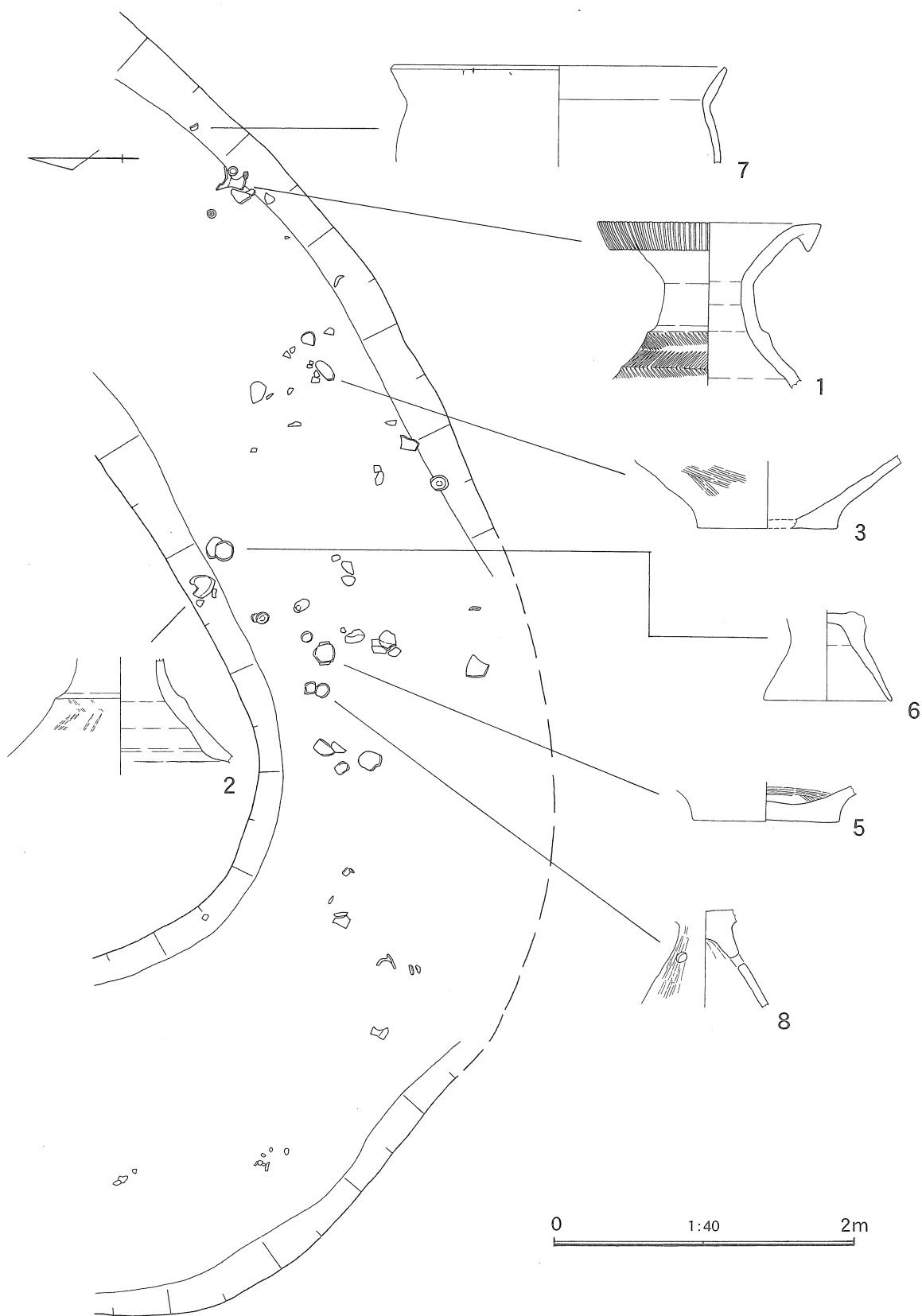


图18 青木遺跡方形周溝墓実測図

21は須恵器坏蓋、8世紀。22は須恵器坏身、8世紀前半。23～25は須恵器甕片、内面に青海波文を残さない。7～8世紀の所産。26は須恵器甕片、内面に青海波文をкаろうじて残す。6世紀の所産。

総括

青木遺跡は浅羽低地に流入した旧原野谷川の自然堤防上に位置し、古くは弥生時代最末期から古墳時代前期古段階に始まり13世紀代まで存続するが、中心は古墳時代前期、12世紀前半～13世紀前半の2時期である。

今回の調査を含めてこれまでに3次にわたる調査が行なわれた。1次調査は県営圃場整備に伴い1982・83年度に実施し¹⁾、2次調査は県道浅名同笠線の歩道設置に伴って1990年に実施した²⁾。

古墳時代前期の特徴的な遺構として楕円形状・円形の、炭や焼土の混入する覆土が見られる祭祀土坑がほぼ全域で確認され、中にはS字状口縁の脚付甕の良好な土器群を出土するものも含まれる。

今回の調査においても過去の調査で明らかになった遺跡の存続期間と同じ結果が得られたが、方形周溝墓と想定した溝から出土した土器群は青木遺跡では最古のグループに属し、浅羽低地中南部の自然堤防上における集落の進出と、水田開発の上限がこの辺りであったことを示している。

2回目のピークは摂関家の殿下渡領としての性格を持ち、勸学院領としては全国で最大規模の荘園であった浅羽荘の立荘とその後の低地開発に関連するものであろう。

註

- 1) 『青木、馬場第一・第二遺跡』浅羽町教育委員会 1984年
- 2) 『青木遺跡』浅羽町教育委員会 1990年

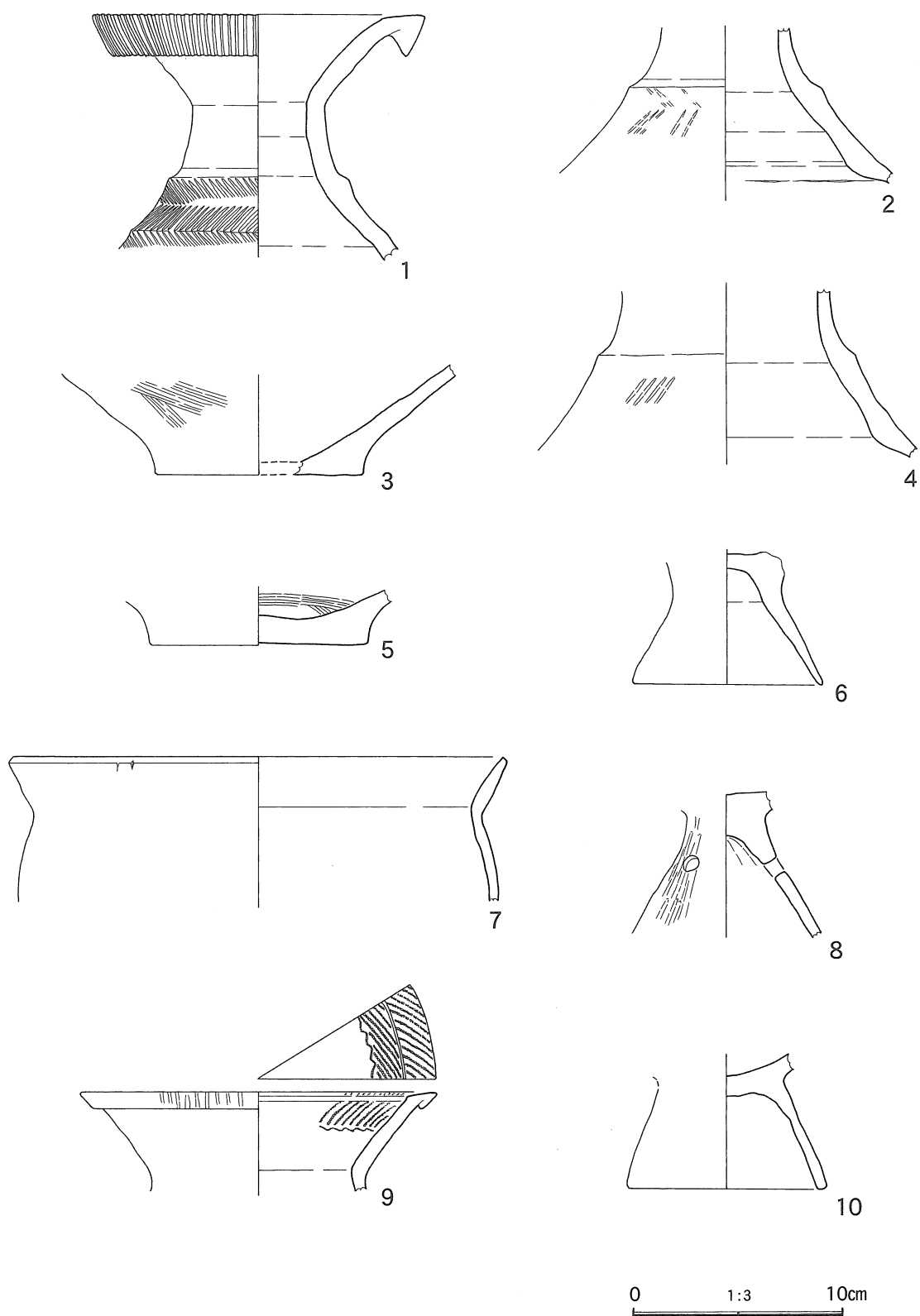


图19 青木遺跡出土遺物 (1)

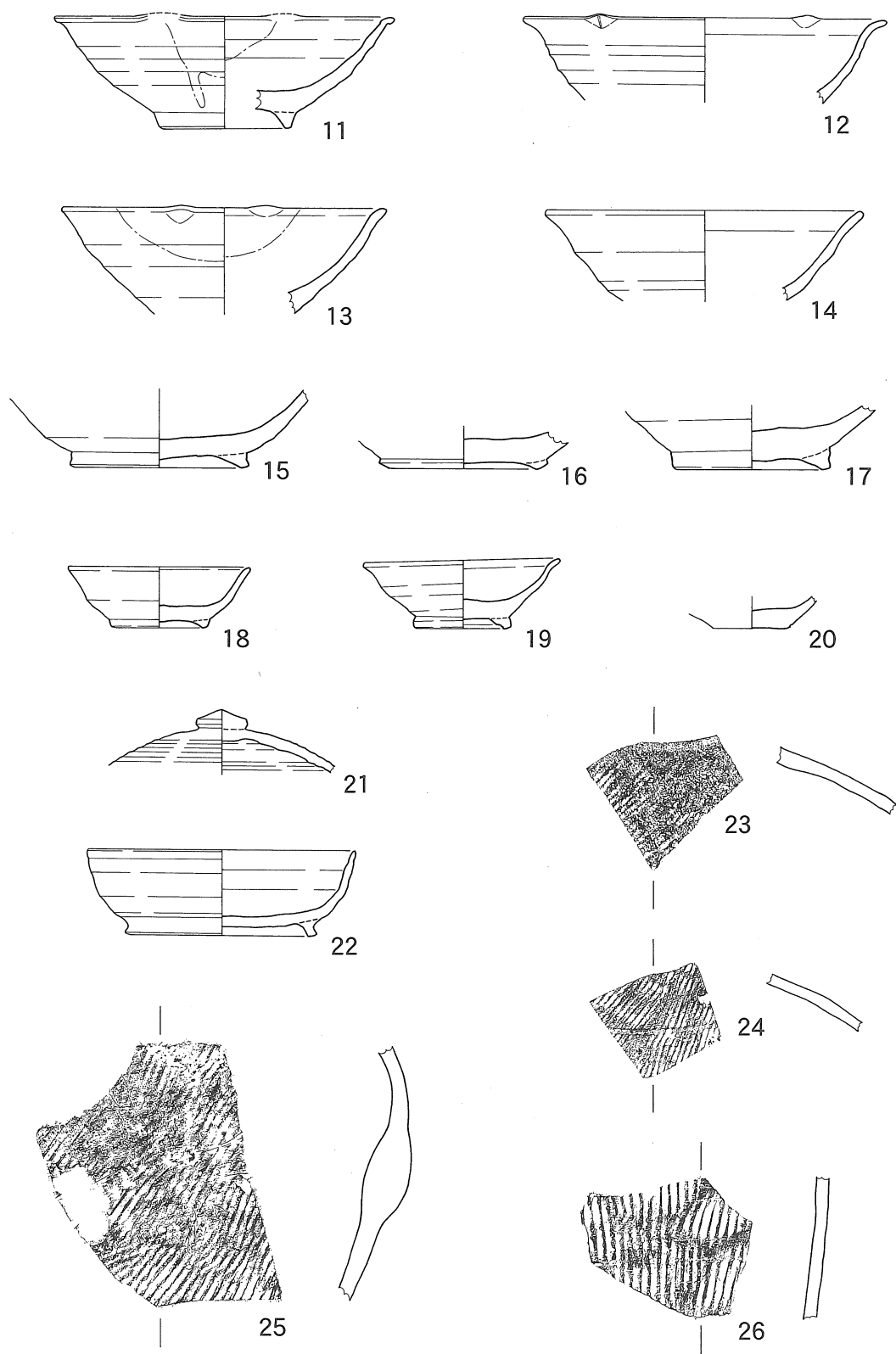


图20 青木遺跡出土遺物 (2)

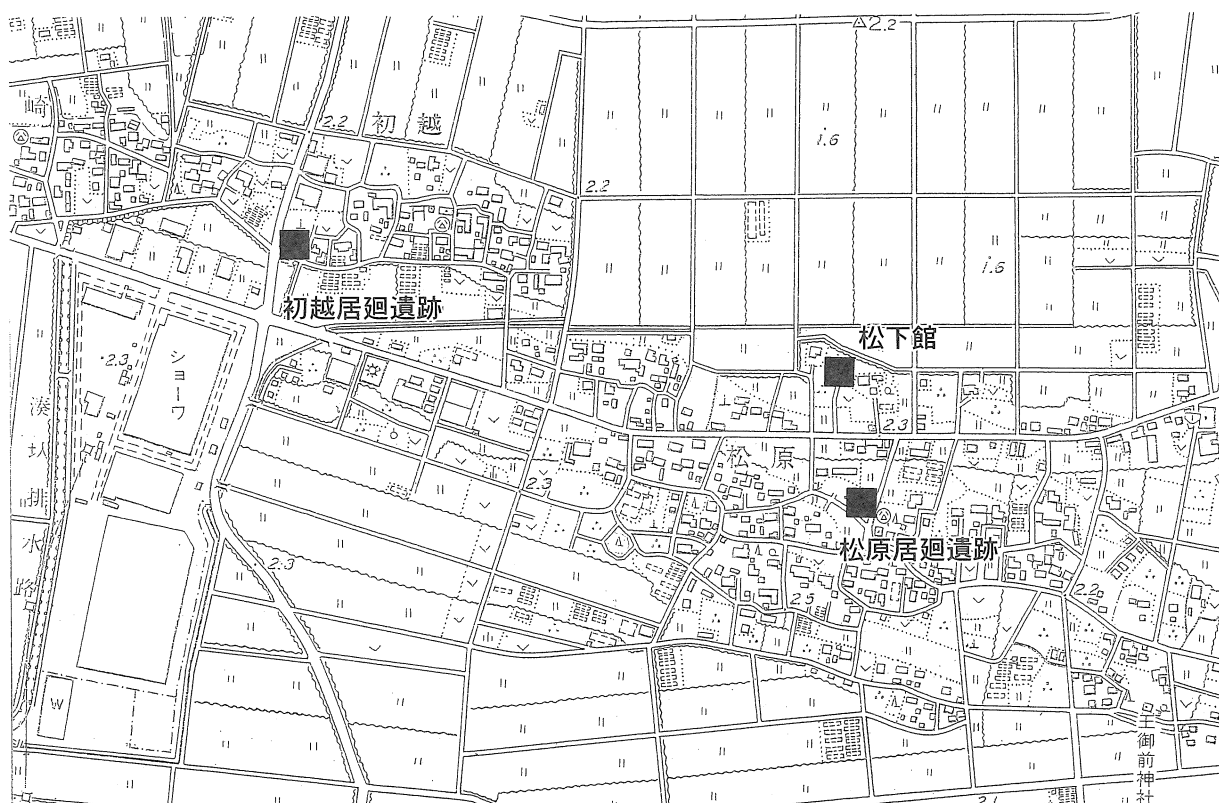


図21 初越居廻遺跡・松原居廻遺跡・松下館の調査地点 (S=1/10,000)

4 初越居廻遺跡

調査に至る経緯

1998年6月に行政書士事務所を通じ、初越字居廻りの土地、106番1・104番1・103番1の3筆、計641㎡に対して駐車場造成に伴う農地転用の事前書類が社会教育課に回ってきた。申請地の北側砂洲上には両墓制墓地の脂墓が、西裾には埋墓がそれぞれ存在し、そこでは山茶碗片が表採されることから、現地において遺構所在の有無を確認するための試掘確認調査を平成10年度国庫補助事業として行なうことになった。

調査経過

1998年7月8日 器材を搬入し、L字状にトレンチを設定して人力による掘削を開始する。

9日 現地は砂洲上で遺構が確認されても検出が困難なため、土層断面調査に切替え、南北方向に1m幅で掘り下げる。

14日 砂洲に近い北側はトレンチの幅を広げ、遺構が検出される面まで掘り下げる。

20日 東壁・北壁の土層断面図作成、写真撮影を行なう。

21日 埋め戻しを行ない、器材を撤収し終了する。

調査成果 (図22, 図版11)

トレンチの実掘削面積は34㎡である。土層は1層が表土及び攪乱土で東壁中央部及び北壁付近は深く攪乱が及んでいる。2層が遺物包含層で黄灰色砂質土(2.5Y5/1)、3層が地山土でにぶい黄色砂(2.5Y6/4)となっている。東壁北側では有機質を含んだ土層が南へ傾斜しながら潜って行く状況が観察されたが、遺物を含まず、低湿地へ移行する地形の名残と見ている。

断面には土坑が3ヶ所で確認された。遺構内覆土は暗灰色砂(2.5Y4/2)である。

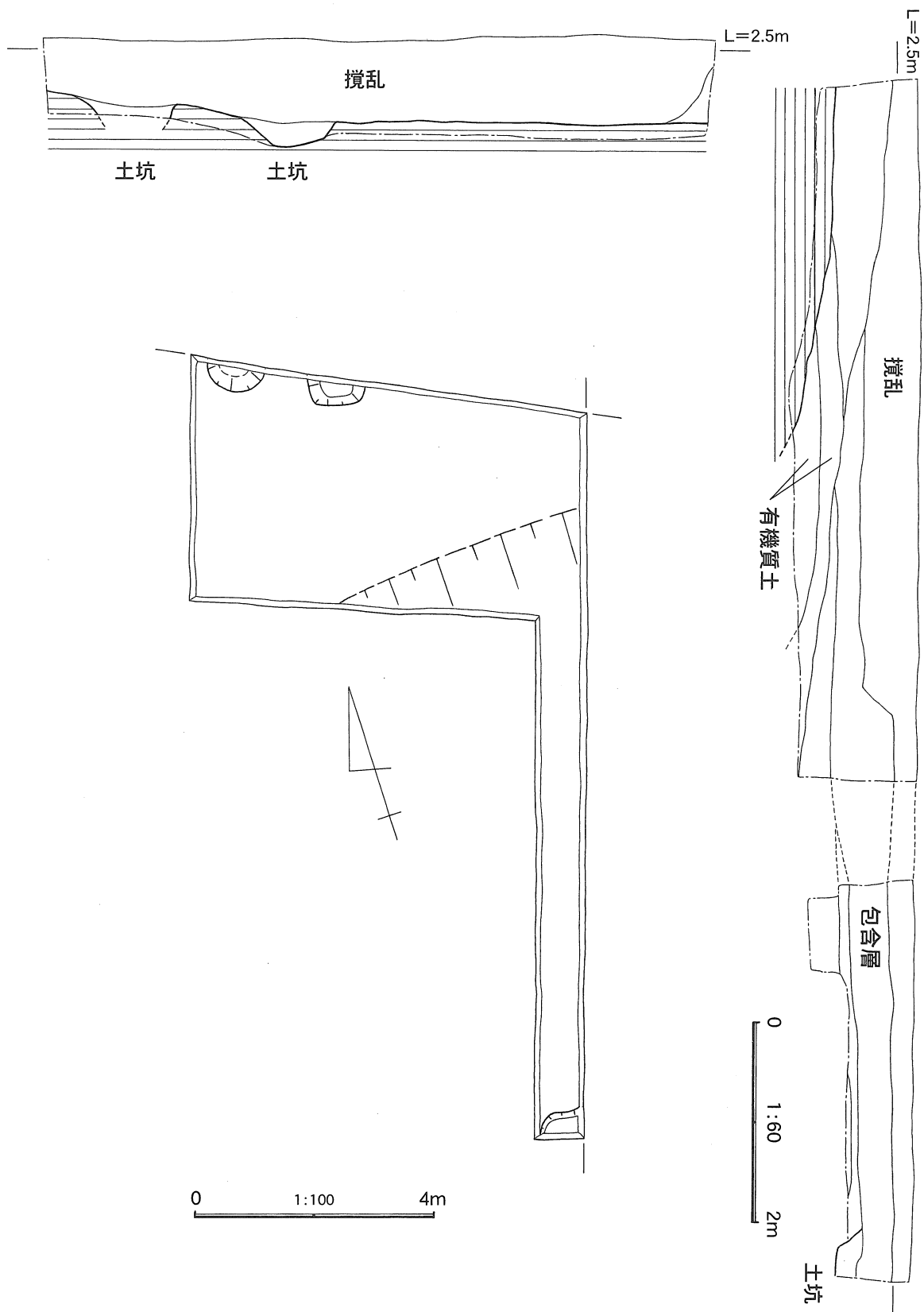


図22 初越居廻遺跡トレンチ全体図

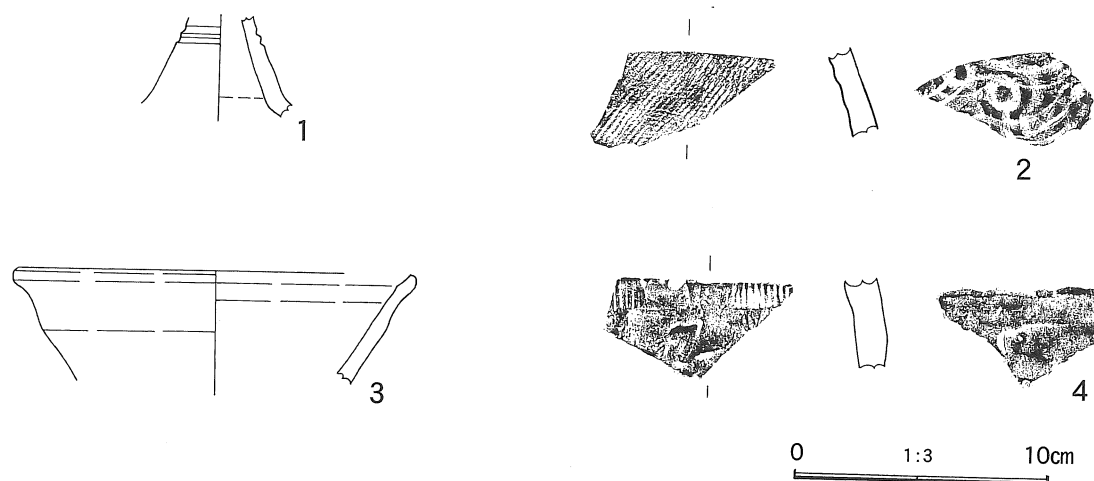


図23 初越居廻遺跡出土遺物

遺物（図23，図版15）

遺物は4点が2層目の遺物包含層から出土した。1は須恵器高坏脚部、7世紀代。2は甕、内面に青海波文をとどめている、6世紀代。3は知多・渥美産山茶碗6期、13世紀前半。4は常滑甕。

総括

遺構は確認されなかったが、古墳時代に遡る遺跡が砂洲上に存在した可能性が考えられるようになった。断面にかかった3ヶ所の土坑は、砂洲西裾に見られるような脂墓の下部構造をなす墓壇と考えられる。

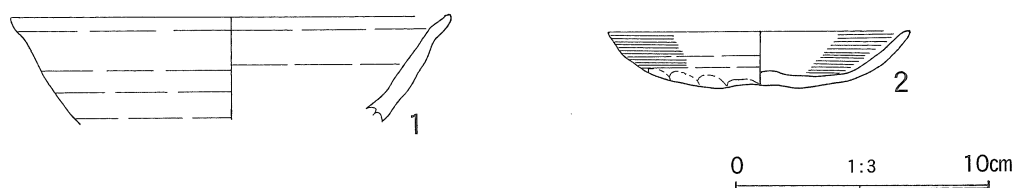


図24 松原居廻遺跡出土遺物

5 松原居廻遺跡

調査に至る経緯

1999年5月に行政書士事務所を通じて松原居廻り1063-1・1064-1の2筆、計987㎡に対して長屋住宅建設計画が持ち上がり、埋蔵文化財所在有無の照会があった。照会地は通称「郷蔵」と呼ばれ、近世期における飢饉時の非常米備蓄の倉庫が設けられた場所に隣接しており、これに関する遺構の存在と、周辺部で散見される中世期に遡る遺跡の存在を確認するための試掘確認調査を実施することとなり、平成11年度国庫補助事業として着手した。

調査経過

1999年6月8日 5ヶ所にグリッドを設けて掘り下げ、このうち1ヶ所で溝を確認。

9日 バックホーを搬入し、グリッドを繋いで南北方向の東トレンチ、東西方向の北トレンチ、南トレンチの3本のトレンチを設定。シートを被せ一時休止する。

17日 トレンチの精査。北トレンチ・南トレンチの写真撮影、土層断面図作成。

21日 トレンチ内の遺構精査。

22日 東トレンチの写真撮影、土層断面図作成。

24日 バックホーでトレンチの埋め戻し、器材を撤収し調査を終了する。

調査成果 (図25、図版11)

この遺跡も砂洲上に存在する遺跡で、地山土は灰色砂(5Y5/1)である。調査の結果、トレンチ内で2条の溝と柱穴群、北側の砂洲間低地へと傾斜する地山面を確認した。溝1は北トレンチからは見つからず、西側へ曲がるか、溝2と合流するのであろう。溝2は東トレンチで見つかり、深くなりながら東へ緩く曲がっている。柱穴は北トレンチの中央部に集中し、他では確認できないので居住空間はここに集中していたらしい。

溝1は幅4m、深さ1mの規模を持つ。遺構内覆土は2層からなり、上層が暗灰黄色砂(2.5Y4/2)、下層が有機質を多く含んだ暗青灰色砂(5PB4/2)。溝2は幅5m、深さ60cmの規模を持つ。遺構内覆土は溝底付近が有機質を多く含んだ暗青灰色砂(10BG4/1)、両肩付近が褐色砂(10YR4/4)である。

遺物 (図24、図版15)

遺物は2点出土し、いずれも遺構に伴っている。1は渥美・湖西産山茶碗、2型式、12世紀後半～13世紀初めの所産。溝2内から出土。2はかわらけ、13世紀代か、溝1内から出土。

総括

郷蔵に関する遺構は確認できなかったが、13世紀代に遡る遺構が確認された。砂洲に直行して走る南北方向の溝は、屋敷地の区画溝であろうか、遺構の密度は散漫で、並行して延びる複数の狭い砂洲上に、分散しながら住居が営まれ、散村集落を構成していた景観を想定させる。

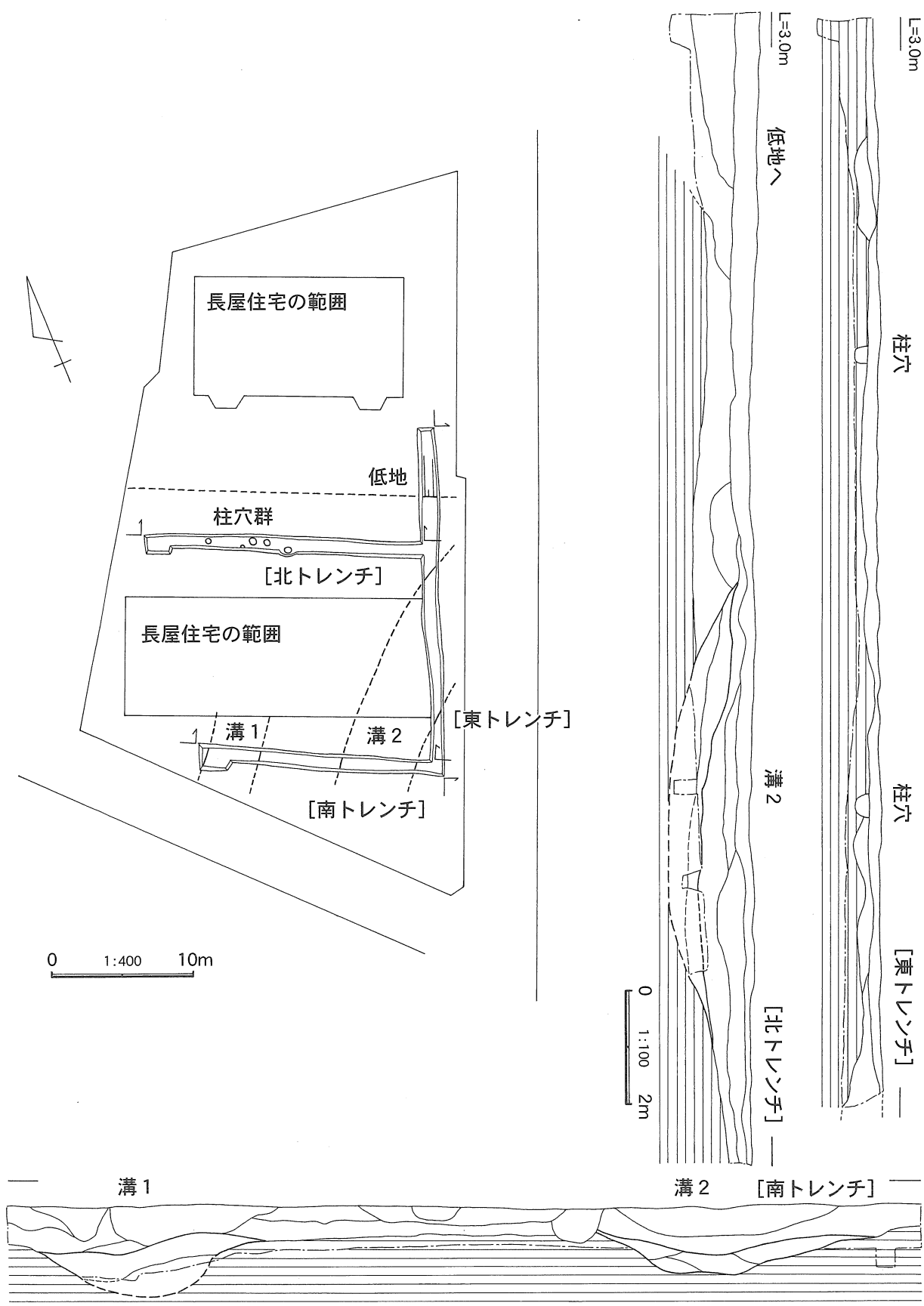


図25 松原居廻遺跡トレンチ全体図

6 松 下 館

調査に至る経緯

1998年4月に行政書士事務所を通じて松下元一氏の住宅敷地内を分筆し、個人住宅を建設したいが、埋蔵文化財が存在しないかという問い合わせを受けた。松下家は東浅羽地域の中で最も古くより現地に居住した開発領主の系譜を引く旧家と把握しており、その屋敷跡地は約13,000㎡に及ぶ。

社会教育課ではこの機会に試掘確認調査を実施し、その推定を裏付ける資料が得られないかと考え、平成10年度国庫補助事業(浅羽町内遺跡等発掘調査事業)として調査を実施した。トレンチによる試掘調査の結果、中世居館の存在が裏付けられたと判断し、遺跡名を松下館とした。

調査経過

1998年5月11日 器材搬入後草刈りを行ない、L字状のトレンチを設定し掘削開始。

12日 トレンチを掘り下げ、断面観察を主体とした調査を実施。

13日 東西トレンチ写真撮影・図面作成実施、一部埋戻しに入る。

14日 南北トレンチ写真撮影・図面作成実施、埋戻しを完了し撤収。

調査成果 (図26, 図版10)

松下館は縄文海進に伴い形成された東西方向に延びる砂洲上に形成されており、地山土は灰色砂で柔らかい。このため、トレンチは、後の建設後に及ぼす影響を考慮し、最小限の範囲ということで、建物が立つ部分に東西・南北方向でL字状になるよう設定した。地山土が砂地なため、人の重量で遺構面が崩れ、狭い範囲での平面検出が不可能だったので、遺構は全て土層断面で把握した。掘削面積は約10㎡である。

南北断面は中央部が大きく攪乱を受けていたが南端で土層堆積の良好な部分が残っており、表土を含め地山土まで5層の堆積がある。1層が表土、オリーブ褐色砂質土(2.5Y4/4)、2層が暗灰黄色粘土(2.5Y5/2)、3層が粘土ブロック混じりのオリーブ褐色砂質(2.5Y4/3)、4層が有機質を含んだ黒色砂質土(2.5Y3/2)、5層が有機質を含んだ黄灰色砂質土(2.5Y5/1)、地山土が、にぶい黄色砂(2.5Y6/4)となり、4・5層が遺物包含層、掘立柱建物の柱穴は4層上面から掘り込まれている。

柱穴 東壁において3穴分を確認した。掘り方内の覆土は黄褐色砂(2.5Y5/6)。

溝 北壁において溝3条分を確認した。いずれも2層上面から掘り込まれており、東壁の柱穴群よりは新しい。溝1・2は切り合い、溝2が新しい。同規模の溝で90cm、深さ50cmあり、遺構内覆土は2層からなり、上層が黒褐色砂質土(2.5Y3/2)、下層が暗灰黄色砂質土(2.5Y4/2)。

溝3は土坑1に切られる。幅3.5m以上、深さ60cmの大きな溝で黄褐色砂質土(2.5Y5/4)。

土坑 壁が垂直に近く立ち上がる。幅1.3m、深さ1.0mの規模。遺構内覆土は3層にわかれ、上層が黄褐色砂質土(2.5Y5/6)、中層が暗灰黄色砂質土(2.5Y4/2)、下層が灰色砂質土(5Y5/1)となる。

遺物 (図27, 図版16)

松下館からはパンコンテナケースに換算して1/3程の量が出土した。内訳は半分がかわらけ片で、残りが近世陶磁器類、中世陶磁器類、古銭3枚(貼りついて銘が読めず、恐らく中世期)、土錘片1となっている。図示できる遺物は全て表土及び攪乱土から出土した。

1は常滑甕口縁部、中野編年8型式14世紀後半、2は竜泉窯青磁、鎗蓮弁文碗、14世紀後半。
3は非ロクロ成形のかわらけ、底部はヘラ切り。16世紀中頃～後半。4はロクロ成形のかわらけ、16世紀中頃～後半。5は内耳鍋口縁部。

6は瀬戸の天目碗、17世紀代。7は志戸呂産陶器。8は肥前の茶筒碗18世紀代。9は瀬戸鉄絵の梅

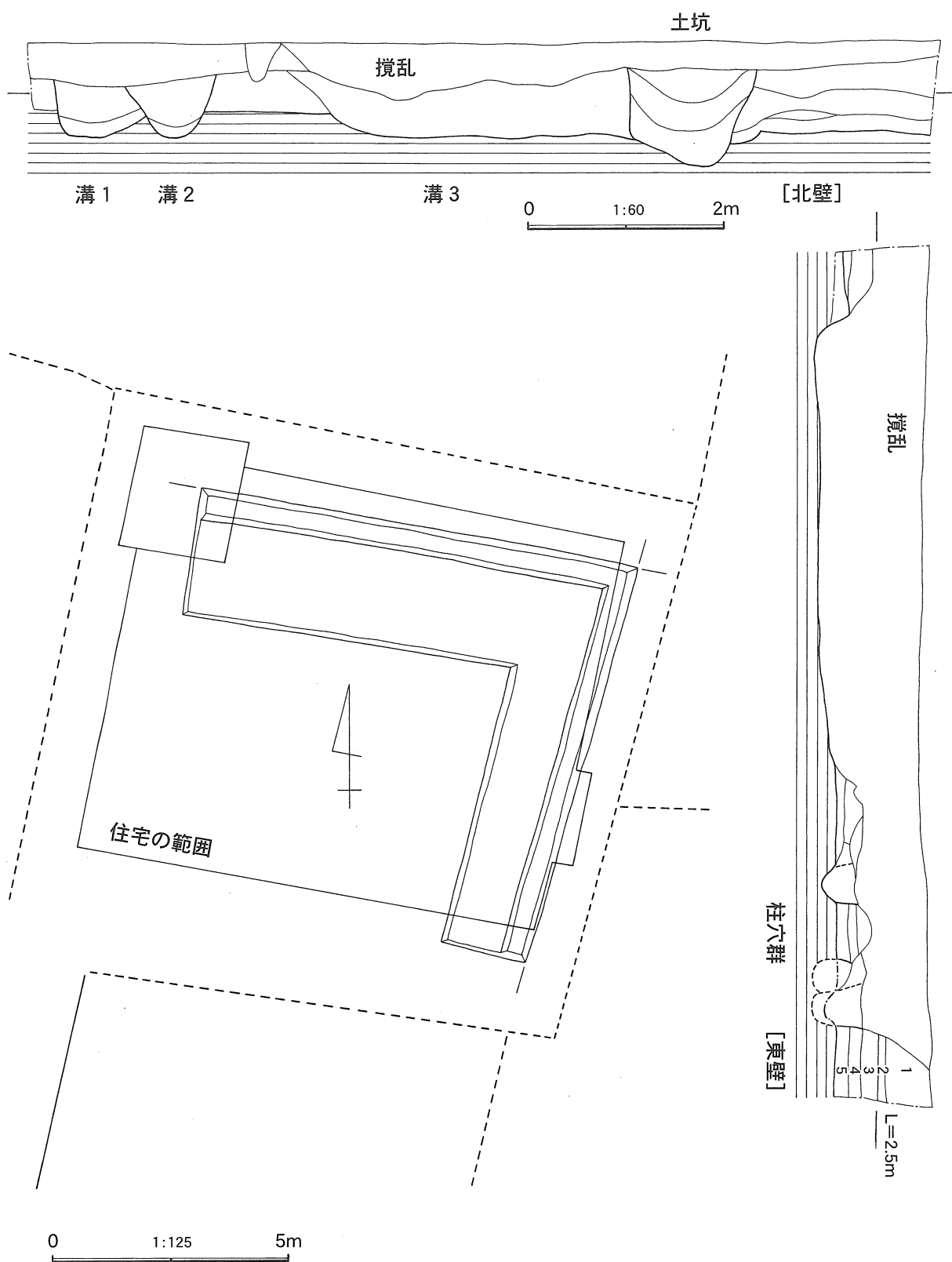


図26 松下館トレンチ全体図

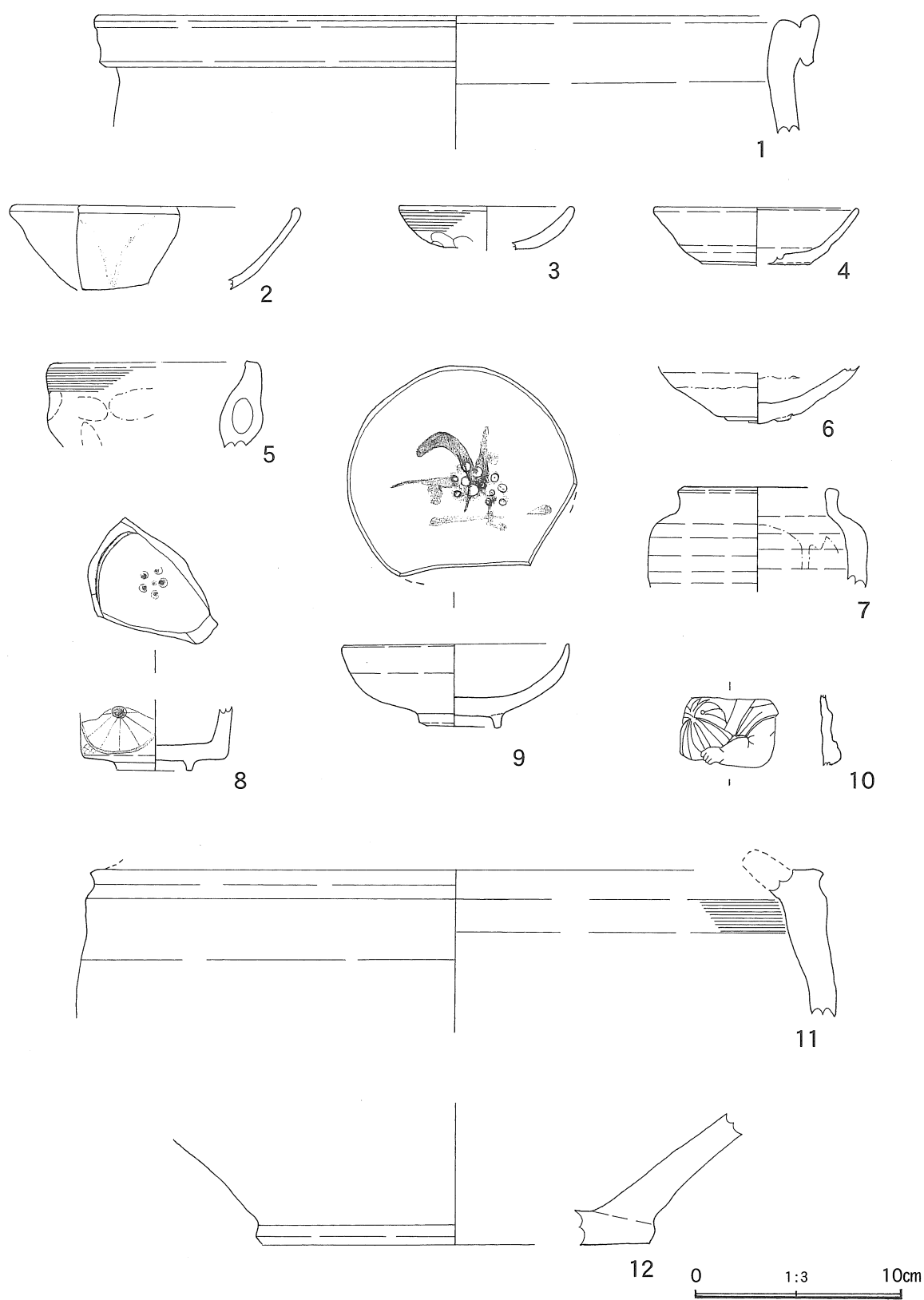


図27 松下館出土遺物

紋皿(瀬戸村)、18世紀後半、8小期。10は土人形、深川人形と呼ばれるものか。

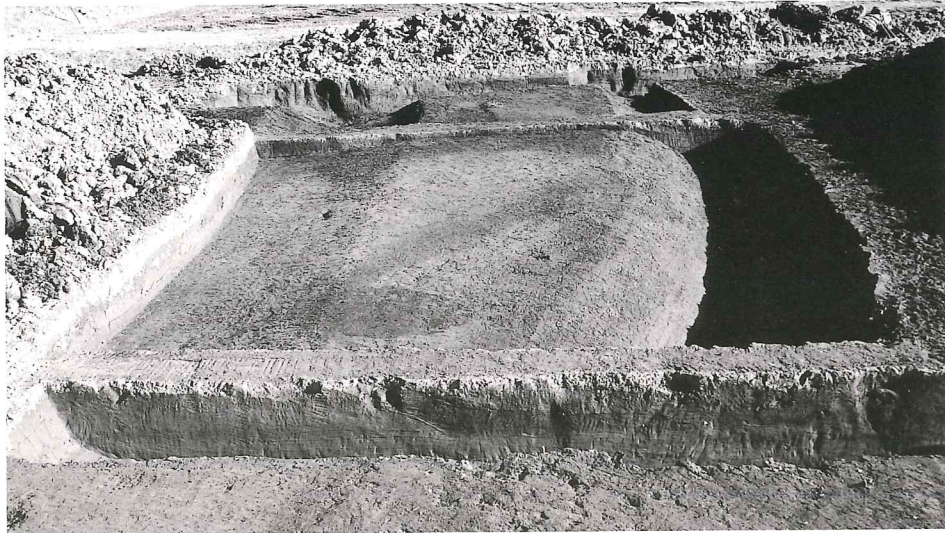
11は常滑水甕口縁部、18世紀代。12は常滑甕底部、17世紀以降のもので焼きがあまり不良品。

総括

今回の調査によって、松下家の屋敷地が14世紀後半かそれ以前に成立した可能性が高まった。この年代は、これまでの浅羽町史の理解の中で、浅羽荘の荘園鎮守祭祀がそれまでの春日社を中心としたものから、三社八幡を中心としたものに移行すると想定した14世紀前半に極めて近く、松下家はこの変化に直接関わった家だと推定している。三社八幡の中で梅田八幡(現在は梅山八幡神社)が筆頭の格付けにあり、この祭祀に戦前まで同家は深く関与していた。

同家には家系と八幡神社との関わりを記した近世期の過去帳が伝わるが、それには「土御門天皇之御宇当家梅田八幡宮勸請…長禄四年(1460)十一月八日氏神梅田八幡宮再建遷宮並ニ 浅羽三社八幡宮へ流鏝馬式奉」と記されている。三社八幡で行われていたのは都流の稚児流鏝馬(春日大社若宮・石清水八幡系)で、この時期に祭式をもたらし整備したと理解するには無理があり、14世紀代とすれば妥当な年代であり、今後調査面積を増やして資料の増加を図ればさらに明確になるだろう。

今回の調査は極一部を掘削したに過ぎないが、遺物から見て14世紀後半、16世紀中頃～後半、17世紀以降という3時期のピークを持ち、居館の成立が14世紀後半頃(中国産青磁碗)に推定される成果を収めたのは大きい。



1. 1996年度調査地全景



2. 内耳鍋出土状況



3. トレンチ1断面 溝2の土層



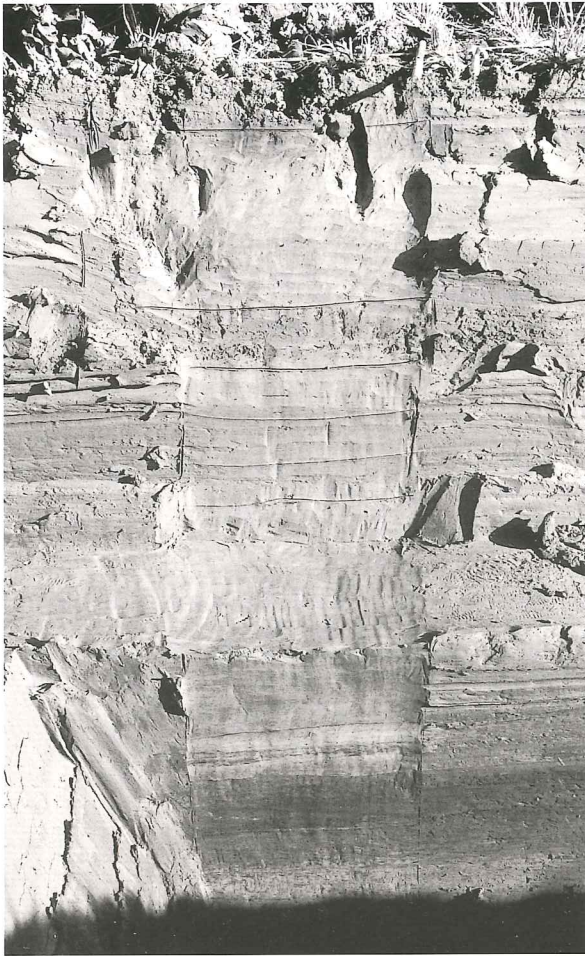
1. 1997年度調査地全景



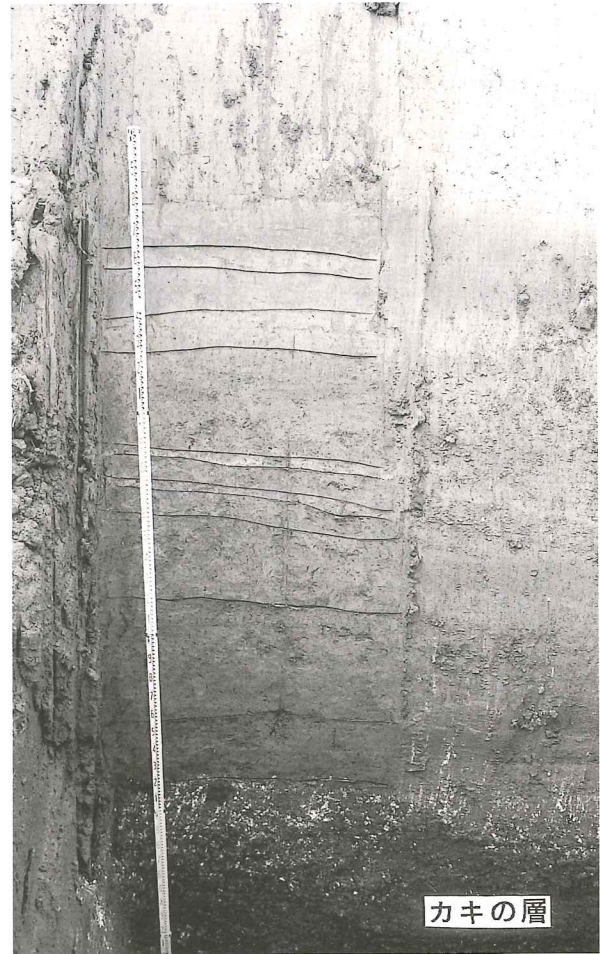
2. トレンチ3断面（南から）



3. トレンチ4断面（南から）



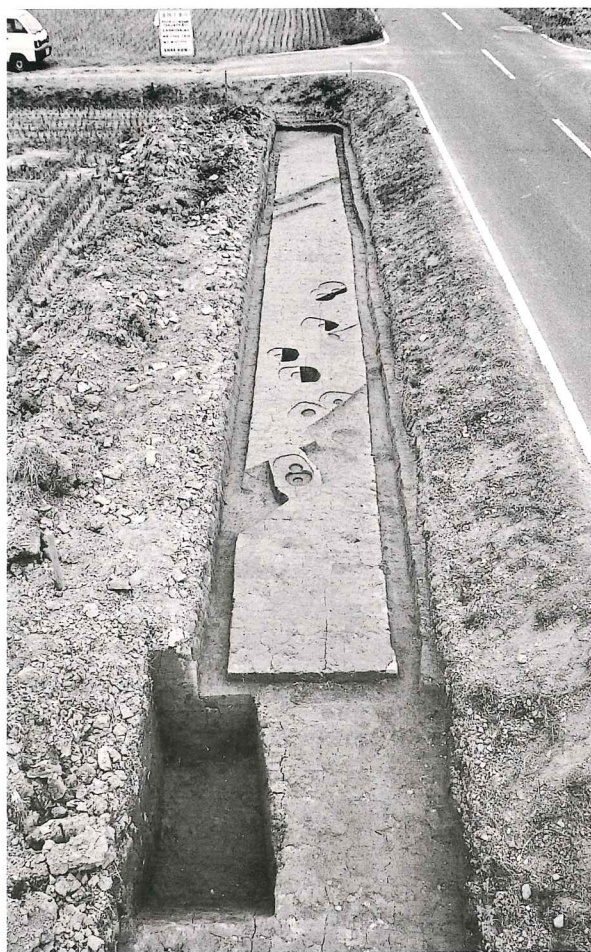
1. 1996年度調査地深掘り部分土層断面



2. 1996年度調査地深掘り部分土層断面



3. マガキ層近影



1. 5トレンチ北全景（西から）



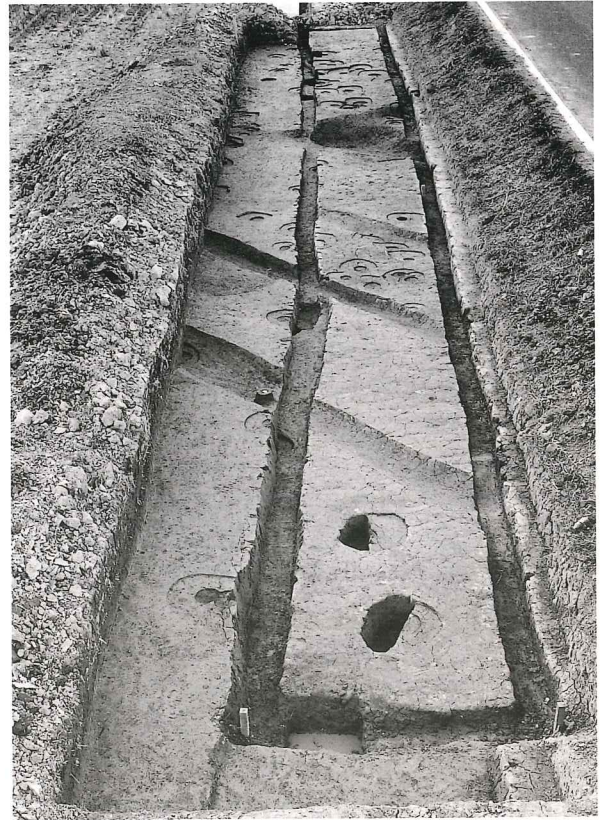
2. 溝2・3完掘後（南から）



3. 西端整地土断面



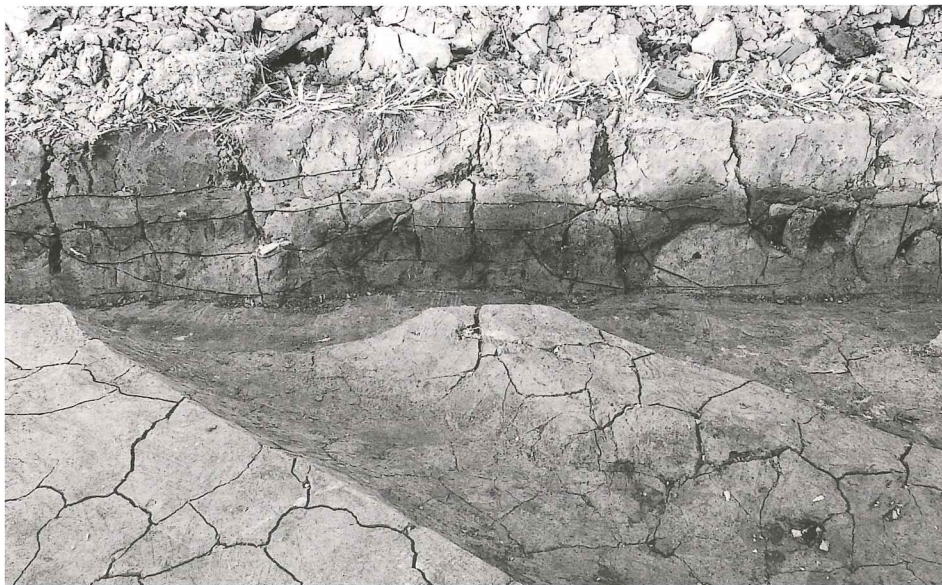
1. 5トレンチ南全景（西から）



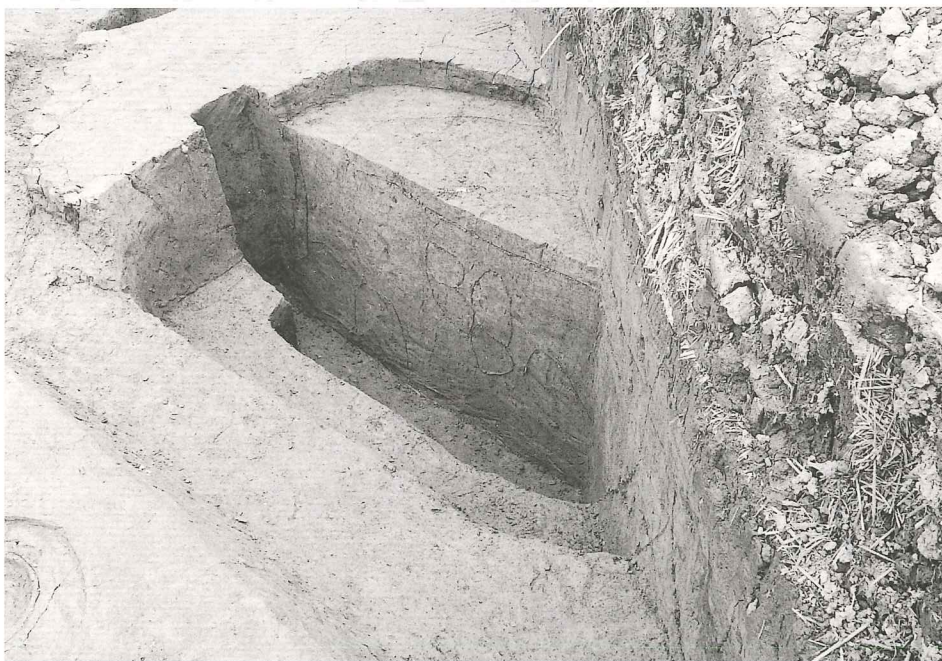
2. 5トレンチ拡張後全景（東から）



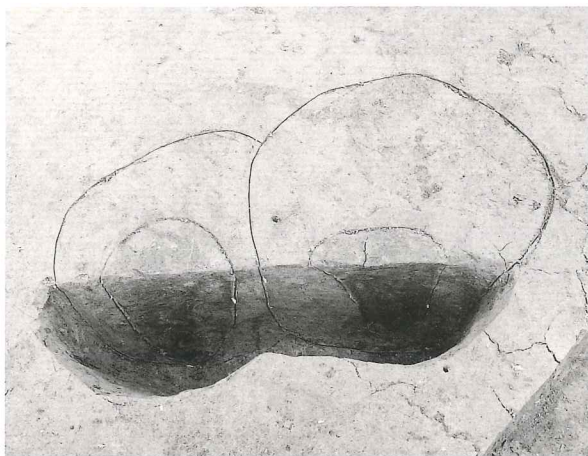
3. 中央部柱穴集中部



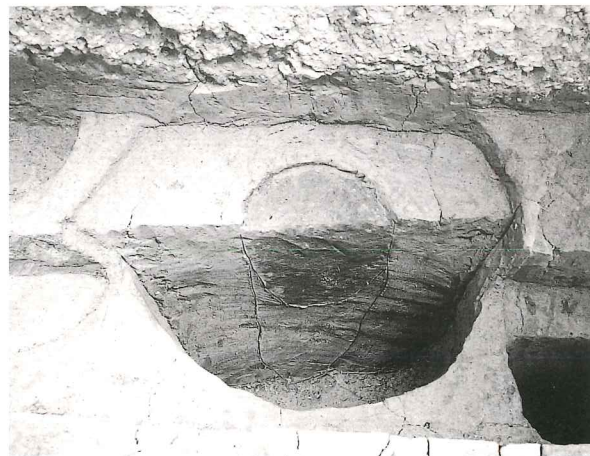
1. 5トレンチ北 溝1・2土層断面



2. 5トレンチ南 土坑土層断面



3. 5トレンチ北 柱穴1・2半截状況



4. 5トレンチ北 柱穴20半截状況



1. 4トレンチ全景（西から）



2. 5トレンチ全景（西から）



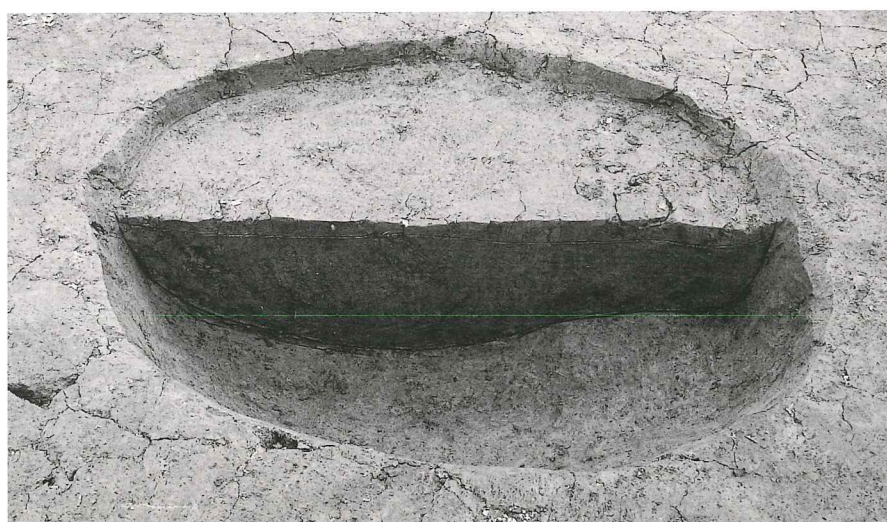
3. 5トレンチ土坑3



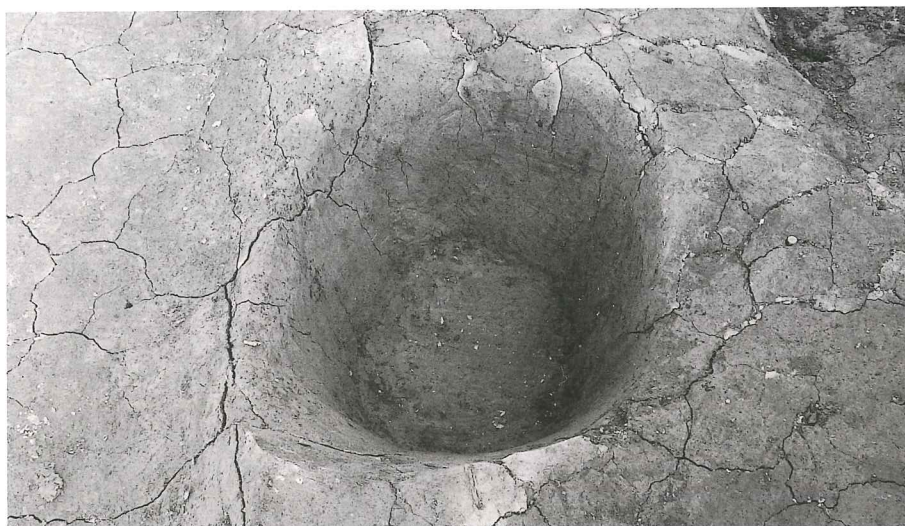
1. 4トレンチ 方形周溝墓（西から、検出状況）



2. 方形周溝墓完掘後



3. 土坑1 半截状況



1. 4トレンチ 土坑2完掘状況



2. 溝3完掘状況



3. 溝3畦の土層断面



1. 南北断面 柱群検出状況（南から）



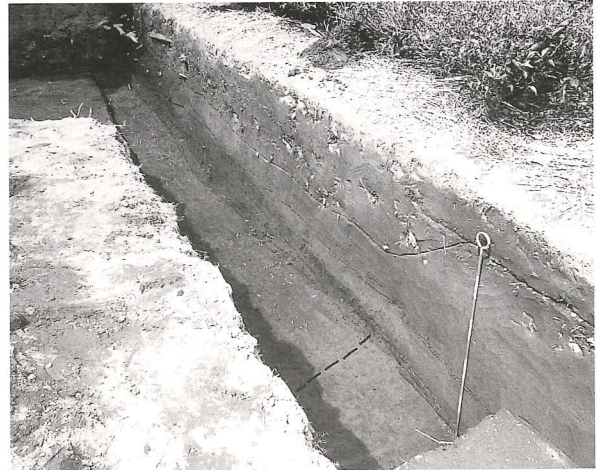
2. 東西断面 遺構検出状況（西から）



3. 南北断面南端の基本土層（手前が柱穴検出状況）



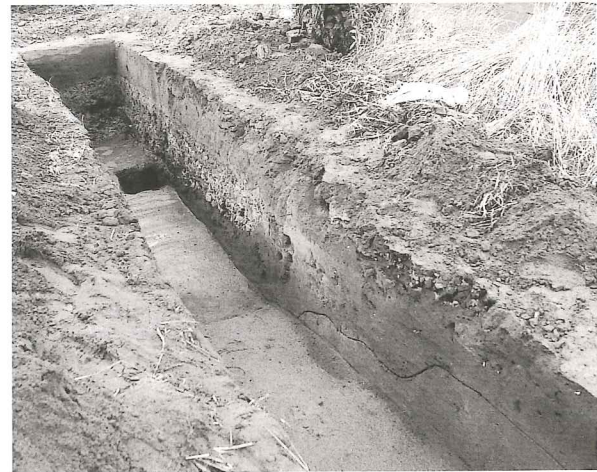
1. 初越居廻遺跡 東壁土層断面（北から）



2. 初越居廻遺跡 東壁土層断面（南から）



3. 初越居廻遺跡 北壁土層断面（南から）



4. 松原居廻遺跡 東トレンチ全景（南から）

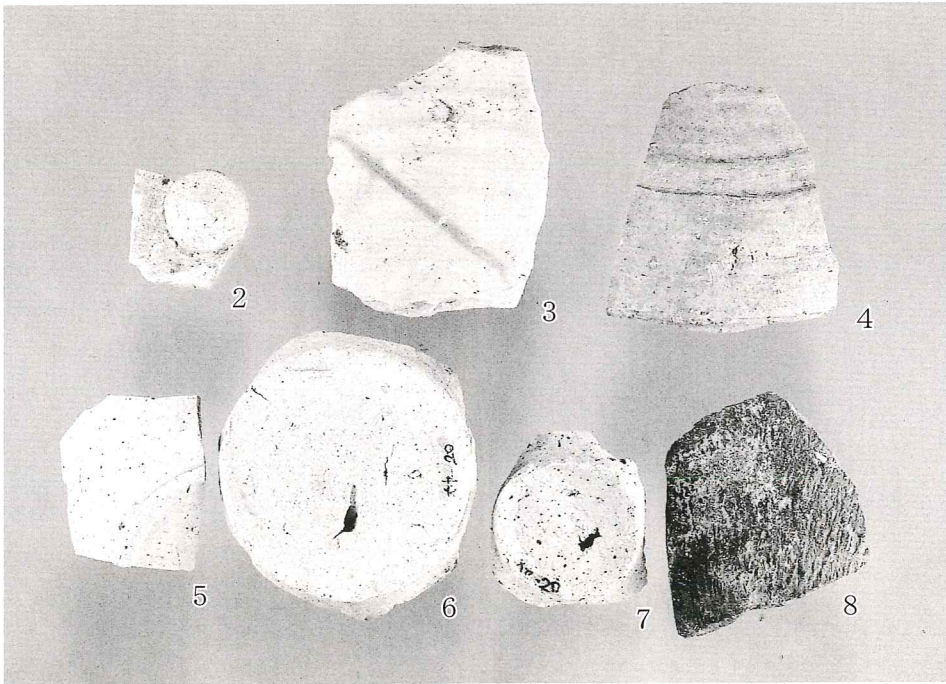
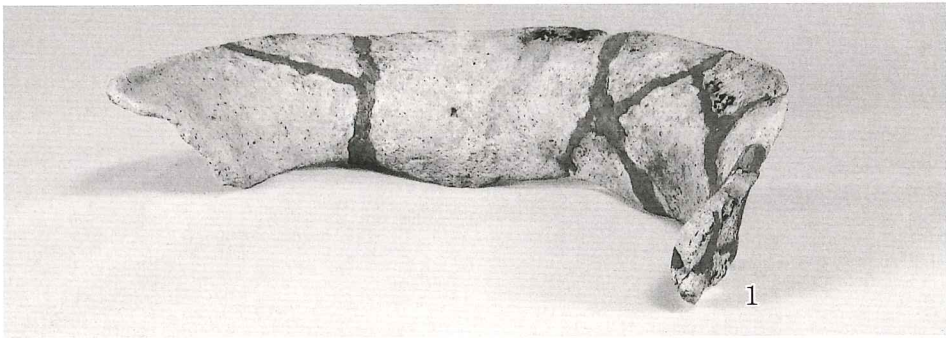
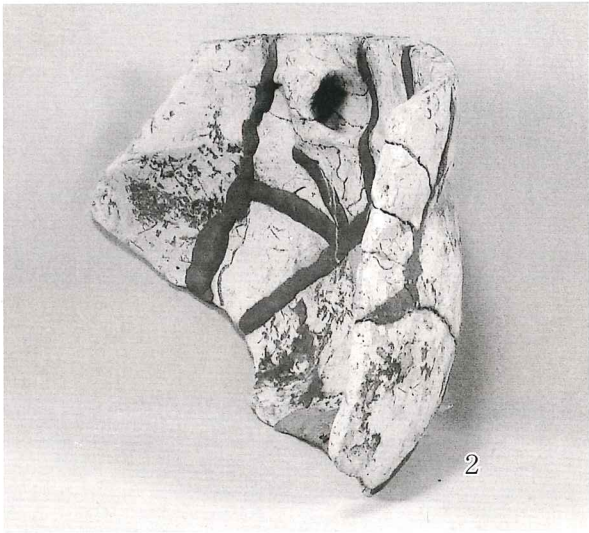
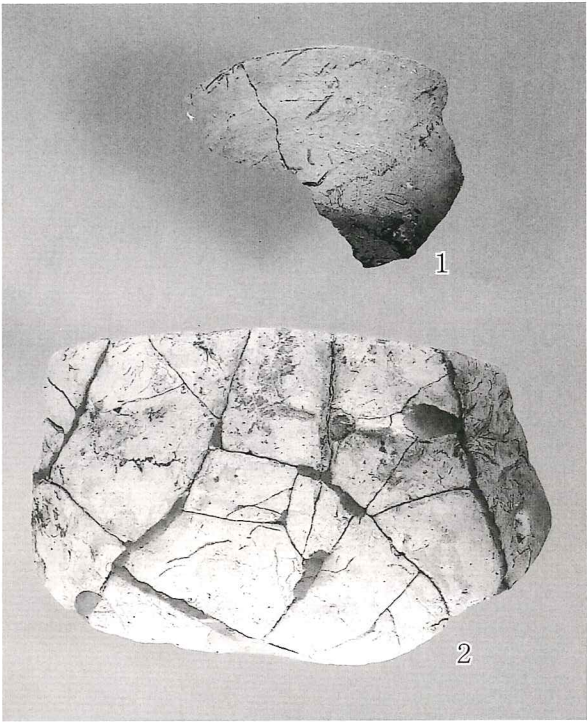


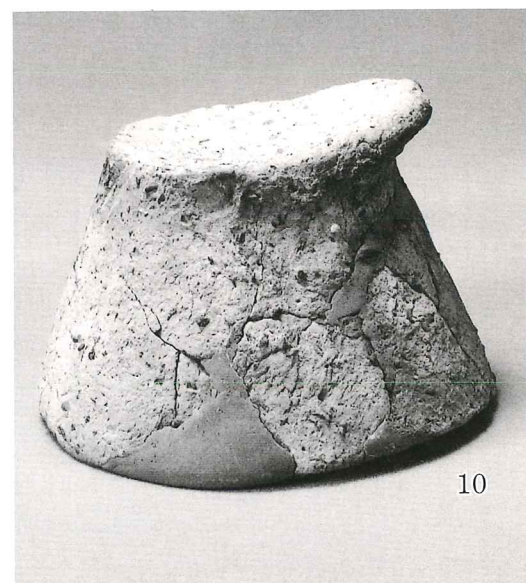
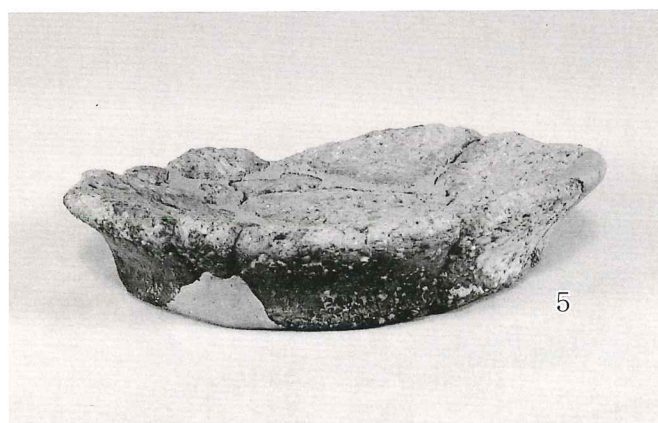
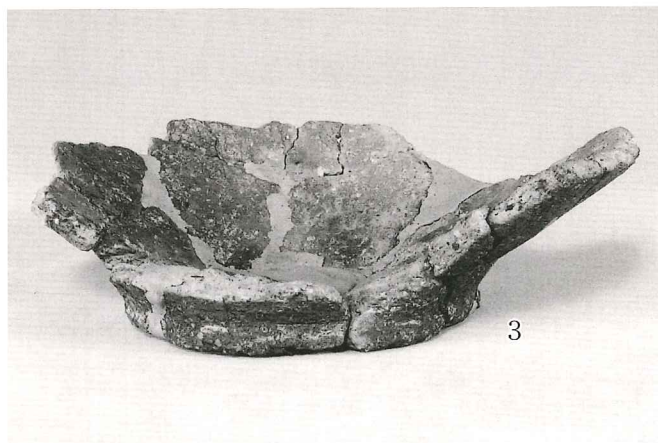
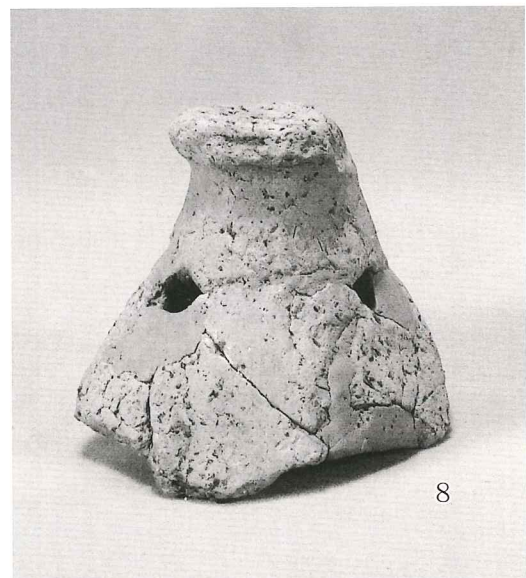
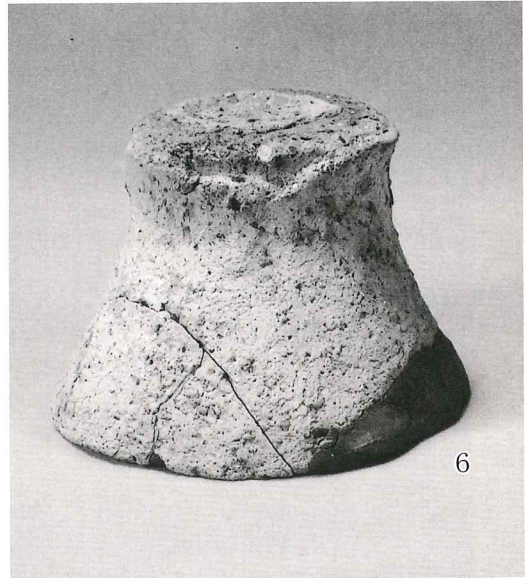
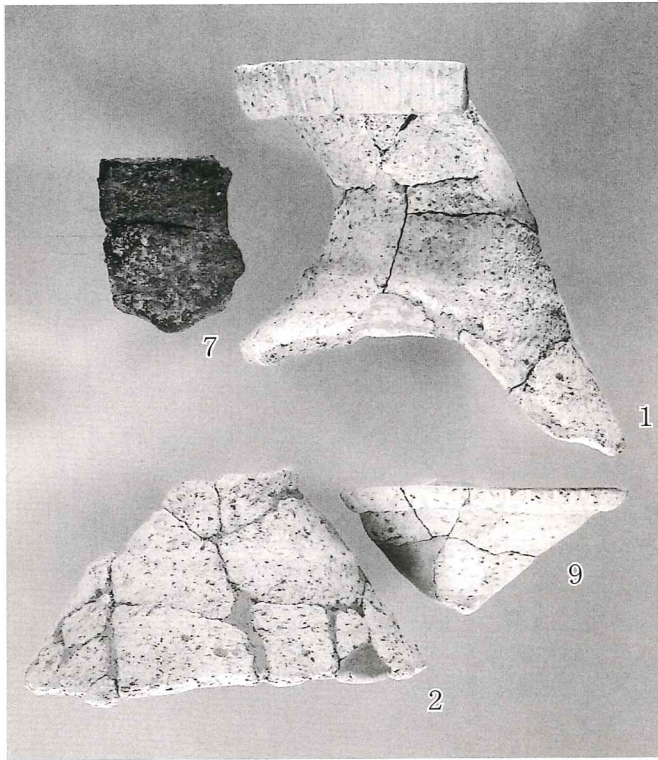
5. 松原居廻遺跡 北トレンチ柱穴半截状況（東から）

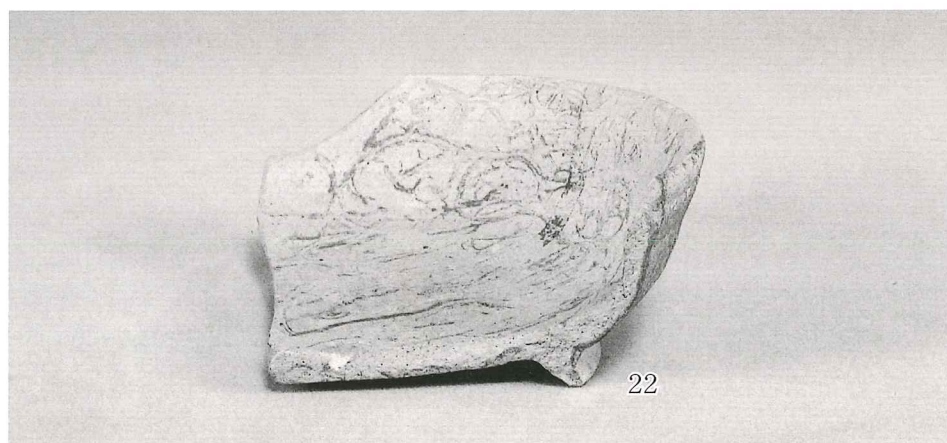
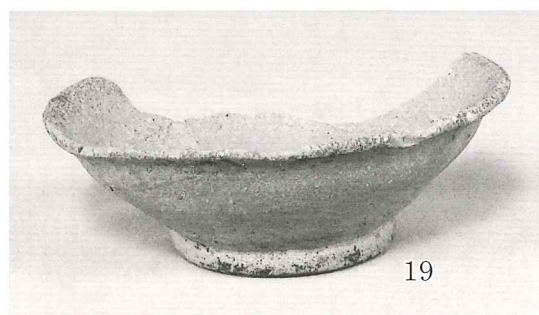
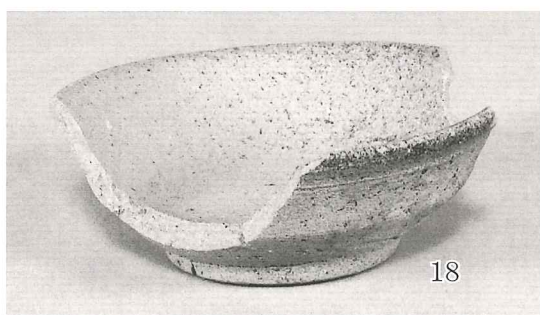
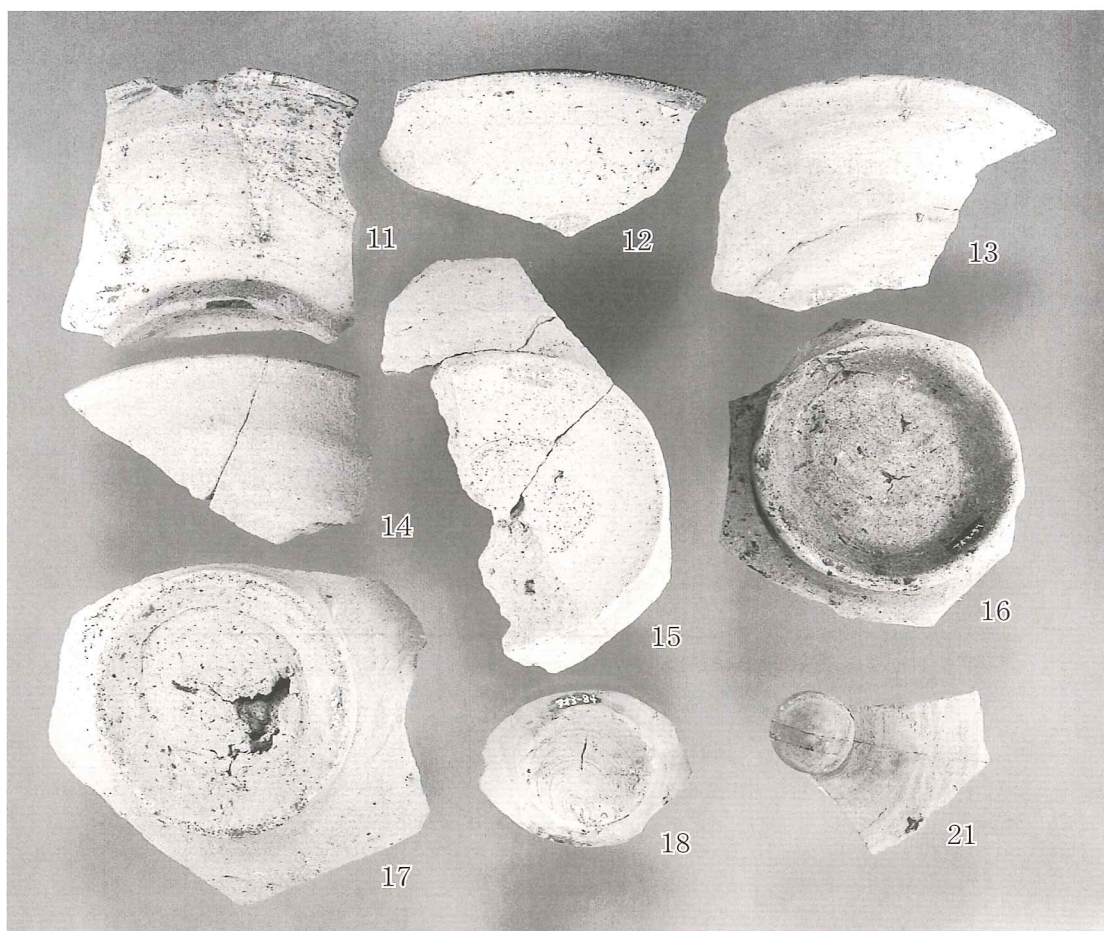


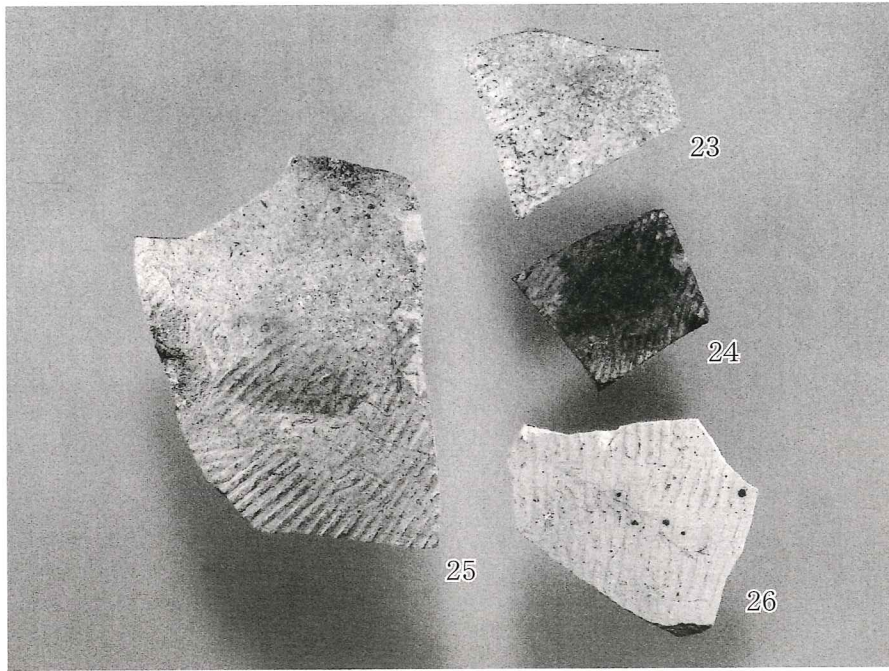
6. 松原居廻遺跡 南トレンチ全景（西から）

図版12 中畦横須賀堤・大屋遺跡出土遺物





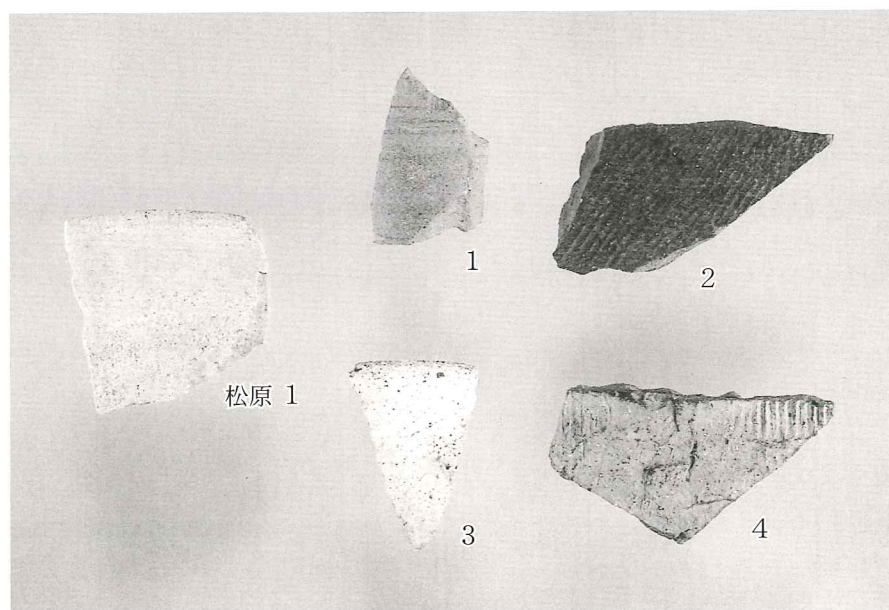




青木遺跡



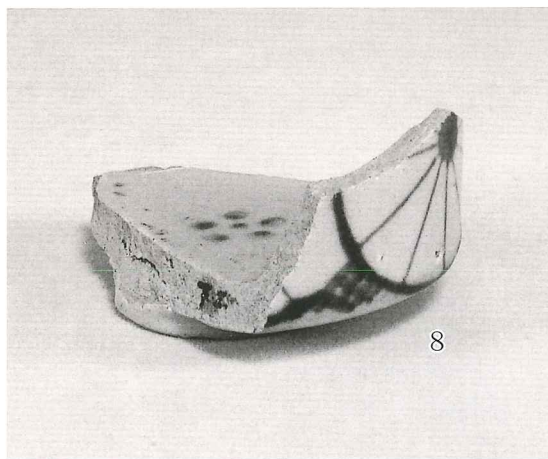
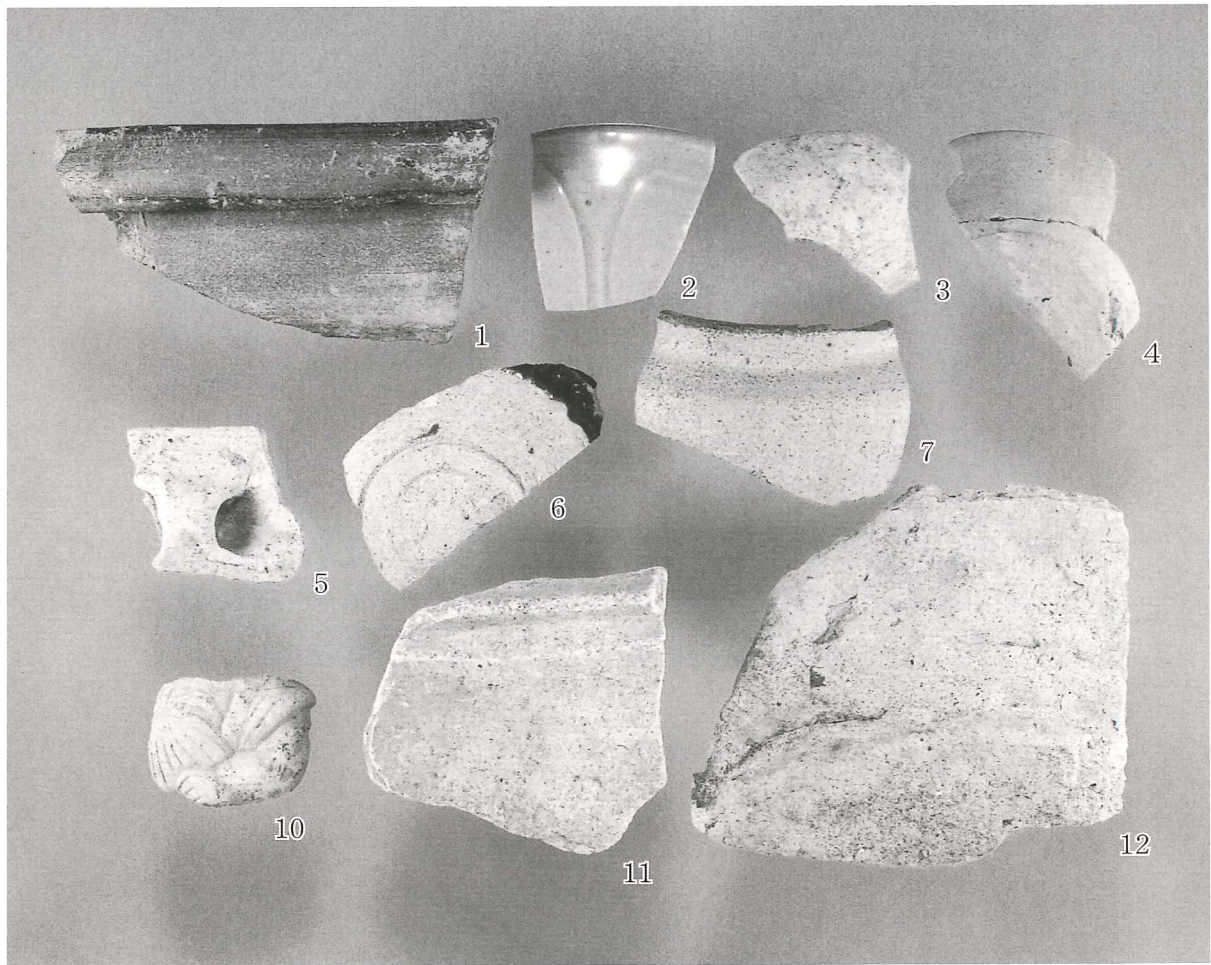
松原居廻遺跡



松原居廻遺跡

初越居廻遺跡

図版16 松下館出土遺物



報告書抄録

ふりがな	ふくろいしないいせきはくつちようさほうこくしよいち							
書名	袋井市内遺跡発掘調査報告書Ⅰ							
編集者	山本義孝							
編集機関	袋井市教育委員会 袋井市浅名1028 TEL0538(23)9269							
発行機関	袋井市教育委員会 袋井市浅名1028 TEL0538(23)9269							
発行年月日	2006年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なかうねよこすかづつみ 中畦横須賀堤	しずおかけん 静岡県 ふくろいし 袋井市	22216	62	34°41'46"	137°56'21"	19961202～98 0330	3750m ²	下水道終末 処理場建設
おおやいせき 大屋遺跡			55	34°41'32"	137°56'23"	19961018～ 1129	968m ²	歩道設置
あおきいせき 青木遺跡			31	34°41'34"	137°56'9"	19970919～ 1014	495m ²	歩道設置
まつしたやかた 松下館			63	34°41'17"	137°55'37"	19980511～14	10m ²	個人住宅建設
はつこしいまわりいせき 初越居廻遺跡			64	34°41'23"	137°55'8"	19980708～21	34m ²	駐車場造成
まつばらいまわりいせき 松原居廻遺跡			65	34°41'11"	137°55'38"	19990608～24	120m ²	長屋住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺物		主な遺構	特記事項	
なかうねよこすかづつみ 中畦横須賀堤	堤防	中世(13・16世紀)		山茶碗・内耳鍋		堤跡・溝	浅羽荘開発領主関連	
おおやいせき 大屋遺跡	居館	11～13世紀		灰釉陶器・山茶碗・瓦		溝・整地土		
あおきいせき 青木遺跡	集落	弥生終末～古墳		土師器		周溝墓		
まつしたやかた 松下館	居館	中世(14世紀)		竜泉窯青磁		柱穴・溝		
はつこしいまわりいせき 初越居廻遺跡	散布地	6～7世紀、中世		須恵器		墓墳		
まつばらいまわりいせき 松原居廻遺跡	集落	中世		山茶碗		柱穴・溝		

静岡県 袋井市

袋井市内遺跡発掘調査報告書Ⅰ

2006年3月31日発行

編集・発行 袋井市教育委員会

印刷 静岡県磐田市二之宮 251

株式会社 山田印刷所

TEL(0538)35-6151
